

41546

教科書文庫

4
F10
41-1923
20000050942

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

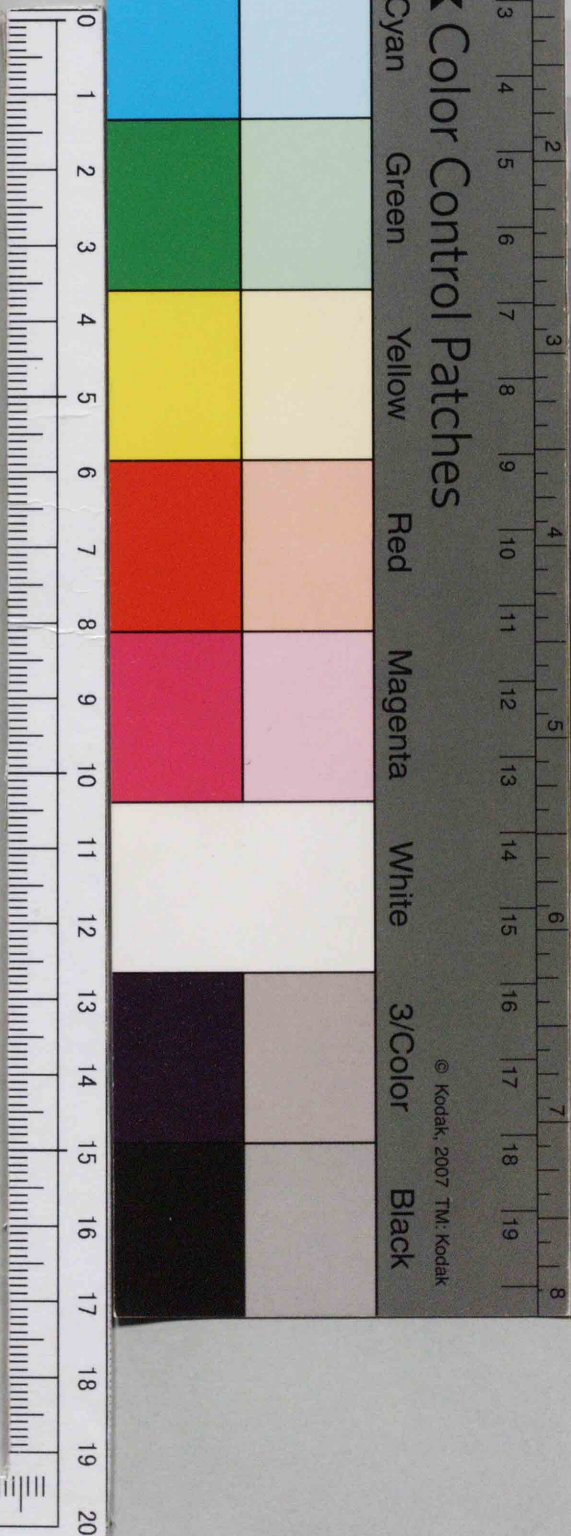


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Fu 10
資料室

國文新讀本卷四

東京帝國大學教授 文學博士 藤村 作
東京帝國大學助教授 文學士 島津久基 共編

國文新讀本

東京 至文堂



國文新讀本 卷四

目次

一 清淨の國	大町桂月	一
二 月雪花	芳賀矢一	八
三 子供とその父	武者小路實篤	一七
四 秋日記	沼波瓊音	三三
五 眞珠貝(韻文)	與謝野晶子	三七
六 大禮參列記(一)	芳賀矢一	四四
七 大禮參列記(二)		四八
八 冬の榛名山	大町桂月	五五

目次

九 露都の四季……………正親町季董……………三二

一〇 莫斯科とナポレオン……………正親町季董……………七一

一一 雀……………北原白秋……………六〇

一二 板倉父子……………(藩 翰 譜)……………

 (一) 勝重……………三二

 (二) 重宗……………三七

一三 鬼作左……………(藩 翰 譜)……………一〇三

一四 新年の葉書……………夏目漱石……………一〇八

一五 オリムピアの回顧……………黑板勝美……………一七

一六 士道と商業……………尾崎行雄……………二六

一七 自惚れ……………三宅雪嶺……………一三〇

一八 意地……………森 鷗 外……………一三五

一九 奈良と伊勢神宮(書牘)……………(旅の書簡より)……………一四

二〇 懐古韻文 新体……………島崎藤村……………一五

二一 文明史上の人たれ……………幸田露伴……………一五

二二 蒲生君平と高山彦九郎……………(歴史讀本)……………一七

二三 克己……………幸田露伴……………一四

二四 人口登録……………佐々木指月……………一七

卷四 目次 終

國文新讀本 卷四

文學博士 藤村 作

共編

文學士 島津久基

一 清淨の國

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質も云ふべきは、清淨の國なることなり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心、清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。

清淨の美を解せざるものは、到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人間はば、

朝日にはほふ山櫻花。

(本居宣長)

この歌が日本一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體朝は一日中にて最もすがくしき時なり。空に些かの曇もなき朝、東天に朝日の輝き出づるは、實に清爽なるものなり。その清暉に、櫻花中の粹たる山櫻の、ばつと映發せるは、なほ更にすがくしきものなり。朝晴天日の出

山櫻、これだけの好き道具が揃はば、何人が爽快を覺えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し、日本男兒の死を惜しまざるに似たりなどといふは、枝葉の事のみ。

田子の浦ゆ打出でて見れば、眞白にぞ

富士の高根に雪は降りける。(山邊赤人)

綠波一面、鏡の如き田子の浦、そのあなたに、何處より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏天を擎げて立てるは、こもまた清淨のきはみにあらず

や。この歌が名歌として、世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

月雪の中や命のすてどころ。(板本其角)

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月、ひこり天に亘えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃をきらめかして、亡君の仇を報いんと討入るは決死の四十七烈士。天も清し。地も清し。人も清し。當夜、吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來血性の快男子にして、清淨の美を身解せる人なり。而して、義士の中に加は

れる大高子葉は、實にその俳友たり。月清きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も俳句も、名句と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術・文藝、一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きも亦然り。近時、外國趣味の入り來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も、日本國民の一般に愛する

花は、必ずや清淨なり。又、建築に於ても然り。日光の東照宮、淺草の觀音堂を見るに、我々日本人は、唯華麗を感じるのみにして、尊さを感じる事薄し。然るに、一たび去つて伊勢の大廟に詣てんか。千木高知れる建築、清淨の美をきはめて、そぞろに西行の歌のしのばるゝを覺えずんばあらず。若し大廟に向つて、壯大を求め、華麗を求むるものあらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたるころあるものご云はざるべからず。

滄海の中にありて、山青く、水清き我が日本は、土地そのものが既に清淨なり。開闢以來、未だ曾て外國に汚されざる我が三千年の歴史が、既に清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が、既に清淨なり。加之、我が國民は善を好み、惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流さへ解して、物のあはれを知れる清淨なる人間なり。我が日本が、古來東海の君子國と呼ばるゝも、宜なる哉。

(天町桂月)

二月雪花

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見る事も出来ないが、月はながめて親しみ易い。太陽が一たび出づれば、群陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破される光景であるが、月輪は萬象を一つに包んで貴賤貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない

*荷田蒼生子
(徳川時代の
の女歌人の
詠)

清涼の光である、皎潔無垢、崇美と稱ふべきやさしい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心は違ふのであらうが、隈なく世界を照らす月光の人間の胸懷に沁み渡るところは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つの影ながら浮かぶは千々の思なりけり。」であ

る。
 東西古今、喜悲苦悶の情熱は幾萬回もなく、幾億回もなく、この光に向つて訴へられた。之を嗟嘆し、之を吟咏した詩歌は、世界各國の文學に充ち満ちて居る。天文學者は曰ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。
 雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにするところは、月に

*僧仙覺の詠
 (新續古今集)

*唐の詩人白樂天が詩中の句。

*月中にあるといはれた宮殿。

似た點が多い。高樓も茅屋も皆同じ色に埋める。げにや花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山。こいふやうに、眼に入るもの、凡てその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々こ散り、紛々こ飛んで、唯一條の川水を殘して、山こいはず、野こいはず、また、く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を

眩せしめるものである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感は少しも變らぬ。花紅葉色々のながめはもとより美に相違ない。花の散つた後の新緑の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を悉したものではないか。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程楽しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を

見ればこそ、春の價值は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、それを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり咲亂れるのは、人生としてあまりに贅澤な感じもする。花はその美しい色の外に、香はしい匂さへ有つて居る。我等の食用のために作つた菜や大根などの花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、どれ程の寂寞を感ずるであらう。閑

寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これはむしろ花を貴んで、その濫用をつしんだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する、人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々しい、華美・華麗・華奢等の語は皆花に本づいた語である。花に關する古今東西の詩歌を擧げるのは愚であらう。余は唯「花をし見れば物思もなし。」といふ古歌を以てすべ

年ふれば齡

てを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つのながめは各、その特長がある。いづれを前、いづれを後といふここが出来ぬ。

山櫻花の下風吹きにけり、

木のもごごの雪のむらぎえ。

これは花を雪にたこへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは、

雲のあなたは春にやあるらん。

これは雪を花にたこへたのである。

笠は重し吳山の雪、鞋は香ばし楚地の花、肩上の

は老いぬし
かはあれど
花をし見れば
ばもの思も
なし。

藤原良房の
詠

(古今集)
大鏡

康資王の母
の詠

(新古今集)

清原深養父
の詠

(古今集)

謡曲葛城中
の句

笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。」

これは雪を月と花とにたこへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

*英國の北方
洋上に在る
大島。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中冰雪に鎖されてゐるアイスランドでは氷は即ち人の家である。この地方には寸紅の目を樂しませるものも無い。又之に反して、全く冰雪を知らぬ地方もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の

住民は瓊玉を綴る雪の奇觀は見た事がない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して夜更を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人は昔も今もこの三つの眺を恣にするここを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。

(芳賀矢二)

三 子供とその父

子供

お父さん、僕は學校へ行くのがいやなのですよ。

だつて皆が僕の事を先生の花だといつていぢめる
 のです。僕が一番なのも僕が出来から一番なの
 でなくて、僕が先生のお氣に入りだから、先生におべ
 つかつかつてお氣に入るやうにするから、一番にな
 るのだと言ふのですよ。花といふのはヒイキとい
 ふ事なのよ。ヒイキといふ字が集まつて花といふ
 字になるのでせう。ですから私は或時先生にさう
 言つたの、皆が私の出来るのは、本當に出来るのでは
 なくつて、先生のヒイキで、本當の實力からいふと、僕
 は五六番以上にはなれない人間で、唯おべつかを遣

ふここがうまいので、僕が一番になつてゐるのだつ
 て。先生、それは本當ですか。本當なら僕を五六番
 に下げて下さい。僕は勉強して自分が本當に出来
 る人間だといふことを示しますからつて。するこ、
 先生は笑ひながら「そんな事は氣にしないがい。」
 出来る生徒は皆出来ない生徒からさう思はれるの
 だ。併し男がそんな事で參つては駄目だ。言ひた
 い事は言はして置くがい。世の中に出るこ、もつ
 と意地の悪い人がある。私達はそれを恐れては駄
 目だ。そんな意氣地がない人間は幾ら出来ても、偉

い人間にはなれない。何と言はれても自分の方さへ正しければ、それでいゝのだ。皆にそれがわかつてもらへないでも、それは氣にしないが、孔子といふ支那で一番偉い人は、人に色々の事をいはれるのを氣にしてゐる人に、自分を省みて疚しい處がなければ、何も心配する事はない。それを心配するのは男でないよ、仰しやつた。お前もさういふ覺悟でゐなければいけない。よ、仰しやつた。僕はそれを聞いて元氣になつて、皆に何を言はれたつて平氣だ。自分でそんな事を恐れるやうな男ではない。さう

思つてゐるの。處が意地の悪い生徒がゐて、それに又おべつかつかつて色々の事をいふ人もくつついて、僕を見るよ、花が來た、先生の花が來た、臭い汚い花が來た。よ、言ふ。そして昨日晝休に歸つて來るよ、机の上に花の畫がかいてあるの。そしてこんな事を聞えよがしに言ふの。「出來ないで出來るものなかに。」
「花。」

僕は腹が立つたの、僕は口惜しかつたのだけど、怒るわけにもゆかなかつたの。聞えないふりをして、孔子の言つた言葉ばかりを考へてゐたの。自分の

駄目になることを皆望んでゐるのね。だけど、僕は駄目にはならないの。それが口惜しいの。殊に二番にゐる人が力が強いので、皆その人におべつつかつかつてゐるの。だから意地悪をされるので、僕の側に來られないの。意地悪に負けるやうな人は、僕は嫌ひだから、僕もさういふ人はつきあひたくなないのですが。學校に行くのが段々いやになつて、これでは困ると思つてゐるの。學校は幾らでもあるのですから、他の學校に移つたらどうかとも思ふの。他へ行けば、こんなに酷い目には逢はないでもすむ

と思ふの。

父

お前のさう思ふのは無理だとは思はない。併し、何處かへ行けばいゝ處があるかも知れないといふ心掛はよくない。それより今にお前の本當の友達が、お前の級から出る事を信じて勉強して行くがよいのだ。もう少しで、きつとお前には本當にたよりになる友達が出て來るに違ひない、お前さへ間違ひなく立派にやつて行くなら。同じ孔子の言葉に徳のある人は獨りぼつちになることはない、必ず友達

があるといつてある。+お前も自分の學問が出来る
 といふ事を自慢にしないで、お前の自慢にしてゐな
 い事は私も知つてゐるが、そして間違ひのない道を
 履んで、僻んだり、恨んだりせず、人に信用し、いゝ人
 が必ずゐるといふ事を信じて、少しでもいゝ處を有
 つてゐる人には厚意を有つやうにして行くこと、きつ
 さい、友達が出来、そしてお前が本當に立派な人間
 で、決して先生に媚びたり、諂つたりしない、學問の本
 當に出来る人だといふ事が皆にわかり出すに違ひ
 ない。+それは二三の人は何時まで経つても、お前の

悪口をいひ、お前を誤解させようとする骨折りの爲に
 はどんな事でもするかも知れない。+だが、先生も仰
 しゃる通り、そんな事は氣にしないで、黙つてゐても
 お前を知つて愛してゐる人が、何處かにおゐて、その人
 がお前の公明正大な人間だといふ事を腹の底から
 知つてくれる事を信じて、何といはれても平氣でも
 つま立派な人間にならうと骨折るのが一番偉い
 だ。+尤も無理しては駄目だ。+早く偉く思はれたり、
 思つたり、早く自分が正直な人間のやうに思はれた
 く思つては駄目だ。+それは耐へるだけ耐へて、耐へ

きれないまで耐へてゐる内に、少しづつ芽が出て來るのだ。お父さんだつて随分悪口言はれた事も、中傷された事もある。山師だと言はれたり、偽善者だと言はれたり、賣名漢だと言はれたり、新聞でたゞかれたり、心ある人にさへ背かれ、疑はれ、親友にまで無氣味な疑を抱かれかゝつた事もある。希望を失ひかけ、人間に愛相をつかし、何をしても始まらないと思ひ、~~蚊~~月蠅い事がいやになつて、淋しく家に一人で閉籠つてゐたい時であつた。併しさういふ時でも、お父さんは、これはいけない、これは墮落だ、自分の徳

の足りない事を忘れて他人をたよりにする罪だ。他人に何か思はれたり、言はれたりして、自分の値はそれで上り下りするものではない。自分の値は唯他人に悪口言はれて淋しくなる時に下り、他人に何と思はれても自分さへ正しくしてゐればいゝと思ふ時に上るものだ。こいふ事を本當に知つてゐたから、それに打勝つてこゝまで來た。これから何度もそんな目に逢ふだらう。だが、怖いのは自分をその爲に賤しくする事だ。そんな目に逢つても自分を益貴くする事が出來たら、それは此の上なく名

譽な事だ。お前は苦しいだらう、又淋しいだらう。だが、私の子として私よりもつと立派な人間になつてくれる氣なら、そんな事には驚かないでくれ。そして立派な人間になつてくれ。正しいと思ふ事をする時は、出来るだけ大膽で、不正な事をする時は、出来るだけ臆病であつてくれ。そしてどんな時でも自棄を起さずに、恥づべき事を恥ぢる代りに、恥ぢてはならない事を恥ぢずに、立派に生きてくれ。心を僻ましてはいけない。お前の友達はきつとお前の學校にゐる、お前の級にゐる。幾らお前の價值を

低く皆に思はせようとするものがあつても、心配する事はない。眞價は一寸の隙間からも洩れて他人の心に觸れる。覆ひつくされる心配はない。

子供

お父さん、僕はもう誰に何と言はれても恐れません。先生とお父さんは僕を知つてゐて下さいますから。

父

お前を本當に知つてゐるものは、私でも先生でもない。それは見えない處にゐる或者だ。それはお

前の心の内にて、恥づべき事と、恥ぢてはならない事を教へるものだ。そして恥づべき事はなるべくしないやうにし、恥ぢてはならない事をするのに勇ましく恐れない事だ。さあ學校へ行つておいて。花さいはれる事は恥ではない。媚びたり、諂つたりする事は恥だが、媚びたり、諂つたりしないのに、するやうに思はれるのを恐れるのも恥だ。他人の陰口をきいたり、意地悪をするのは恥だ、中傷するのはなほ恥だ。だが、陰口をきかれたり、意地悪をされたり、中傷されたり、誤解されたりすることは恥ではない。

それを恐れるのは男として恥だ。それに耐へ、それに動かされないのは實に男の誇だ。行け、我が子よ。男として恥づかしくない男になつてくれ。友達は必ず出来る。出来ないでも恐れないものには、必ず友達は出来るものだ、その人相當の友は出来るものだ。それは鏡に自分の姿が映るやうに間違ひのない事だ。

子 供

お父さん、それでは行つて來ます。

父

行つておいで。(我が子の後姿の見えなくなるまで見送つて涙ぐみながら)お前の一生も樂ではあるまい。だが立派に生きてくれ。神よ、私を守つて下さるやうに、子供を守つて下さい。どうぞ、子供を幸福にしてやつて、勇氣を失はないやうにして下さい。よき友をお與へ下さい。私の過を赦して下さるやうに、子供の過を赦して下さい。そして私以上にお役に立てて下さい。だが、幸福にして下さい、もしお赦し下さるならば。

(武者小路實篤)

四 秋日記

二十日、午後三時、大雷雨襲ふ。夕暮霽る。墓多く庭に出づ。今夜小集を催す。その爲床に活くる花を買はせたるに、檜扇と日々草を買ひ來れり。檜扇は晝のみ咲く花なり。小集の時蕾のみ見ゆ。失敗なり。

雷雨さばかり烈しかりしに、空なほ直らず。翌日も曇り、夜雨あり。廿二日も時々雨あり。遠雷聞ゆ。廿七日、なほ暴雨あり。夜に至つて霽る。蟲聲甚

だ繁し。恍として暗き縁に端坐して聞く。こほろぎきりぎりす馬追かれたき、耳を澄ませば聞き分けらる。

もこ居し下婢訪ひ來り、ふかし芋をくる。はや我が手頸ほどのもあり。

食し飽き、縁に仰臥し、星を見、蟲を聽く。我に於て天下の至樂なり。しばらく夢に入る。覺むれば十二時に近し。月、茶の間の屋根の上に出てたり。

廿九日、長男の爲に宿題を考ふ。余にも出來ず。

今宵蟲聲少し。妻の部屋の瓦斯點けたる夜は、蟲聲

多き心地す。試みに點けさす。多くもならず。

三十一日、朝早き空うす水色にて、朧銀の雲軽く浮かぶ。秋なるかな。秋なるかな。

九月二日、五時にしてなほ稍暗し。東天のあの美しき雲を見よ。紅の色したるが、上らむこする日を逆さまに受けて、やうく輝き來る。屋根の瓦露にしこり、家をめぐりて皆蟲の音なり。

櫻の葉は土用の中より黄ばみて落ち初むるものなるが、あはれに見えそむるは此の頃よりなり。溝際の礫の上に散り布きて、朝日受けたる最もうれし。

Beer-hall*
啤酒飲場
アミバ

圖書館に至れば、暫く見ざりし富士、例のビヤホールビヤホールの左に、藍色の肩を露はしたり。日漸く高うして、また見えぬ。今日風強し。木の葉頻りに落つ。館の避雷針の横に鳥二羽あり。風に向ひ、羽をそよがせ、首を垂れて鳴く。

Sofa*
長椅子
高椅子

休憩室に入る。ソファソファの上に、壁に向ひ坐して眠る人あり。此の人曾て此のソファの上にこちら向き、洋服にして端坐し、手を拱き、瞑目して寂然たりしことあり。面白き人なり。年四十四五、瘦軀にして膚黄に、頭髮寂しうすれ、面常に笑を帯ぶ。席必ず

唐本あり。

此の頃日々館前の砂利の上に曝書をなす。紙の翻るを砂利もて鎮したり。

風愈強し。公孫樹の並木皆聲あり。雀磔つとめての如く飛ぶ。

歸りて始めて今日の二百十日なるを知る。

(沼波瓊音)

五 眞珠貝

五 眞珠貝

眞珠の貝は常に泣く。

人こそ知らね大海は
風吹かぬ日も浪立てば、
浪に揺られて貝の身の
處さだめず伏し轉び、
千尋の底に常に泣く。
まして偶目に見えぬ
小さき砂の貝に入り、
浪に揺らるゝ度毎に、
敏く優しき身を刺せば、

避くる由なき苦しさに、
貝は悶えて常に泣く。

忍びて泣けど、折々に
涙は身より滲み出て、
貝に籠れる一點の
小さき砂をうるほせば、
清く切なきその涙
はかなき砂を掩ひつゝ、
日毎に珠と變れども、

貝は轉びて常に泣く。

東に上る「あけぼの」は

その温き薔薇色を、

夜ゆく月は水色を、

虹は不思議の光彩を、

共に空より投げかけて

珠は眞珠と成り行けど、

それとも知らず、貝の身は

浪に揺られて常に泣く。

(與謝野晶子)

六 大禮參列記 (一)

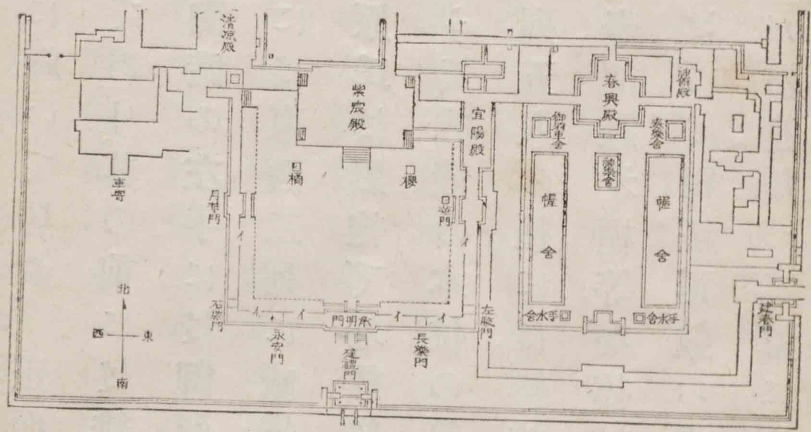
建國以來未曾有の盛儀、世界各國にも類例の無い大典は、いよいよ十一月十日から舉行せられた。其の參列者の一人たる光榮を辱うした余は、つくづく此の時代に生れ遭つた幸福を思ひ、深く家門の譽を喜んで、謹んでこゝに參列記一篇を草するのである。

十日 賢所大前の儀

新築の第二朝集所は、假の御普請ながら檜木の香

も高く、廣々として大規模なものである。控室は宮中席次によつて、それぞれに分れて居る。余は第一室の第三班である。京都大學の舊知を始め、大學時代の友人にも、久々にて面會したのも珍しい。此の敬虔な朝儀の畏まりの中にも、なつかしい友誼を温める機會はあつたのである。八時三十分の振鈴とともに、第一班から、順次春興殿の幄舎へ左右二列となつて行進する。余は左即ち西の幄舎に着座した。春興殿はもこの内侍所の跡へ、御新築になつたのである。檜木の白木造で、御金具はキラ／＼と朝日

に輝いて居る。正面の御扉は開かれて御簾が垂れてあり、其の前には緋袍の掌典がうづくまつて居る。御階の左手には御羽車舎、右手には樂舎があり、大前には東西二列に威儀の人が並んで居る。友人の福原氏は黒袍で卷纓、綏の冠を着け、弓を持ち、胡箏を負うて、威儀の本位の第一位に着いて居る。黒袍の前列五人の後には、緋袍が同じく五人。續いて太刀、弓、壺、胡箏、矛、楯等を捧持した威儀の捧持者が列んで、次ぎには司鉦、司鼓の本位の人、黒の袍、緋の袍、縹色の袍が相連なつて、眞に平安時代の昔に復つた心地がす



御大禮の場の圖

る。大勳位以下大臣親任官等の着席があつて、鉦一聲起立すれば、締盟十餘國の大使、公使、各其の夫人を帯同して、各國各種の禮裝美々しく着座する。平安時代の幻影は直ちに消えて、今の大正の大御世となる。

樂舍から神樂歌が起つて、春興殿正面の御簾が上る。

黒袍の掌典長は内陣に入り、緋袍・縹袍の掌典・掌典補が幾十と知れぬ神饌幣物を捧げる。續いて掌典長の祝詞があるのであらう。此の間諸員起立。終つて間もなく、陛下の出御である。

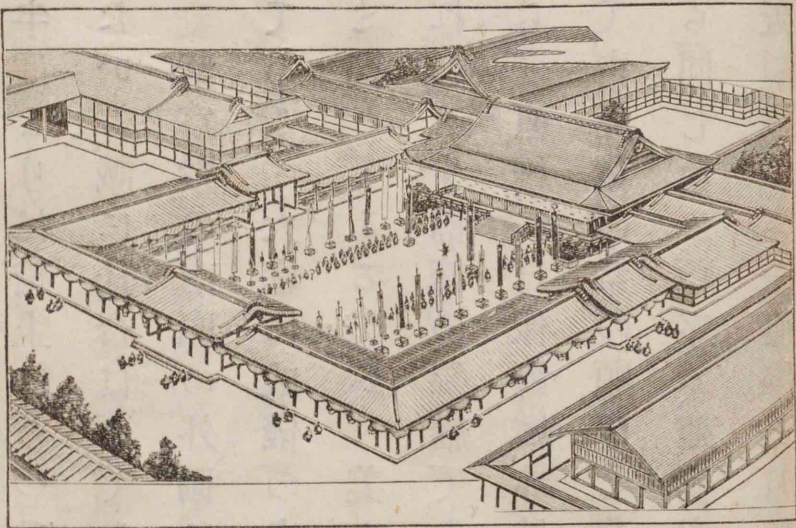
供奉の人々の黒袍の中に、御劔を前に、御璽を後に、眞白帛の袍を召した御姿は神々しく拜せられる。これから親しく御告文があるのであらう。内掌典の振鳴らす鈴の音が鏗鏘と殿内に響いて、幾千の参列員の心耳を清ます。陛下入御あらせられて、皇后陛下の御代拜、允子内親王殿下と承つた。次ぎに皇

太子殿下御拜禮、次ぎに幣物神饌の撤下、神樂歌を奏する。ここ前の通りで、鉦鼓各三聲、こゝに賢所大前の儀はめでたく終つたのである。麗かな日の光が春興殿の御屋根に輝いて居る所へ、鶴鴿が二羽翔つて來たのも、折につけて感を深うしたのである。

七 大禮參列記 (二)

十日 紫宸殿の儀

午前十一時、もこの朝集所へ還つて、晝食を賜はる。休憩中一時五十分、振鈴は午後紫宸殿の儀の開始



紫宸殿前の儀

を報ずる。午前の通り左右二列となつて、建春門から春興殿の前を過ぎ紫宸殿の方へ導かれる。さて左列のものは日華門から、右列のものは月華門からはひつて、東西の軒廊へ參列する。一列九人づつである。余が位置は東の軒廊の

半ばよりは稍上にあつて、南庭に近く二列目であつたから、誠に仕合はせてあつた。

紫宸殿の南廂の外側には、一面に帽額が懸け渡してある。大庭に威儀の人の居並んだのは、賢所大前と同じであるが、殊に美しいのは、大庭に樹て列ねられた二十餘旒の錦旛である。東の方は左近の櫻から一直線に、日像纛旛、赤地の頭八咫鳥形大錦旛、續いて、青・赤・黄・白・紫の順序で菊花章中錦旛が五本、それから同じ色の順序で、菊花章小錦旛が五本、西の方は右近の橋から一直線に、月像纛旛、白地の靈鷲形大錦旛

續いて東側と同様の中錦旛、小錦旛各五旒づつ、威儀の本位よりは稍下位に、大中小錦旛よりは少しく内側に、東西各一旒の萬歳旛が樹てられて、これには魚と巖瓮が畫がかれ、下に萬歳の二字が書かれてある。其の外に矛が各十本づつ左右に立ててあり、これにも小旗がつけてあるので、黄紅白紫入雜つて、其の美観は目も眩い程である。午後の日光はまことに照渡つて、東の軒廊の端に立つた余等は少し熱い位であつた。日像旛の金纛、月像旛の銀纛は殊にキラキラと輝きひらめく。やゝ風立つて來たので、錦旛が

左右に翻るさまが更に見事である。大庭の白い砂も日に輝いて、眼を射るやうである。左近の櫻は半ば紅葉して、少し散つてゐたが、大きな枝が南階の四分一を蔽うて殿中の御有様はよくわからぬ。追々に着席する人が見える中に、大隈首相の姿もあらはれる。南階の上に緋袍を着て起立して居た蜂須賀式部官が一聲高く「警蹕」を唱へる。今しも出御になつて高御座に御登りになるのであらう。やがて御帳を蹙げ奉るのであらう。鉦の合圖に一同最敬禮。間もなく大隈首相は束帶姿で、大禮服の嗣子信常君

と秘書官とに扶けられて、西階から下つて、白砂の上を承明門内まで来て、庭上威儀の座の間を通つて、南階の下に立つ。一步々々困難な歩みも、折が折故かへつて莊重に見えた。此の時陛下から勅語が下つたのであらう。廣い大庭を隔てたこここで、玉音を承るここは出来ぬ。やがて首相は一階々々南階を上つて、北面して壽詞を奏上した。壽詞を手に差上げた後姿も見え、朗々たる音聲は斷續しながら大抵は聴取れた。皇祖に對して即位を奉告あらせられた午前の式の尊嚴なのに比べて、これは又各國使臣

を御前に列ねて、高御座から、内外の國民に大詔を宣らせ給ふので、極めて雄大な氣象に満ちて居る。首相は南階を下つて、兩萬歲旛の中間に立つて、「萬歲」を唱へる。參列の諸員は一同「萬歲」を歡呼する。續いて「萬歲、々々。」建禮門外の儀仗兵の喇叭は高らかに鳴渡つて、間もなく百一發の禮砲が轟く。市中には花火の音、汽笛の響、時は正に午後三時三十分。今しも全國七千萬の國民が同じ心に「萬歲」を唱へ奉り、六百萬の兒童は各、其の校で、奉祝の唱歌をうたふのである。やがて、「警蹕」の聲は再び傳へられた。首相は

元の座に復する。嚴肅な午後の御儀はかくして晴れやかな賑はしい聲の中に終つたのである。

今回の即位の禮はいふまでもなく、明治天皇の御定めになつた登極令に據つて行はれたのである。締盟各國の大公使が賢所大前に列なつたところは實に前代未聞である。國民の代表者たる衆議院議員一同の參列したことも亦、此の度が最初である。此の盛儀を拜し奉つて、今更に先帝の鴻業を欽仰し奉り、國運の進歩を驚歎せず居られぬのである。今よりざつと五十年前、先帝の即位式も亦此の紫宸

殿に擧げられたのである。其の時も參列者の一人であつたといふ大隈首相の今昔の感如何。六十年の昔、黒船の騷に宸襟を惱ませられた孝明天皇が、
一 戈取りて守れ武夫、九重の

御階の櫻風騒ぐなり。

と遊ばされた頃と今日とを比べれば、誰か無量の感慨に打たれぬものがあらう。微臣今日の光榮を思つて自ら涕涙の雙頬に流れ下るのを禁じ得なかつた。朝集所を退下したのは午後四時三十分。

(芳賀矢二)

八 冬の榛名山

丸子山を右に見、二つ嶽を左に見て、上る路三十町ばかり。嶮しかられど、雪あるが爲に歩みやすからず。人の足跡はなくて、處々三又の痕跡あり。荒鷺などの歩みしにや。北風つよく吹きて、地上の雪まき上げられて空に續紛たるに、寒さも忘れて覺えず見されたること幾度なるを知らず。坂路つきて、前には圓錐形の榛名富士あらはれ、左に崔嵬たる相馬山あらはる。春になれば牛羊點綴するなるべし。

音入る

一目茫茫たる高原、白雪地を埋めて、未だ枯草を埋め

ず。摺碓岩を數町の外に見て

奇と稱し、榛名湖の東岸をめぐ

りて快と呼び、天神峠に上り前

後を眺望して絶景と叫びぬ。

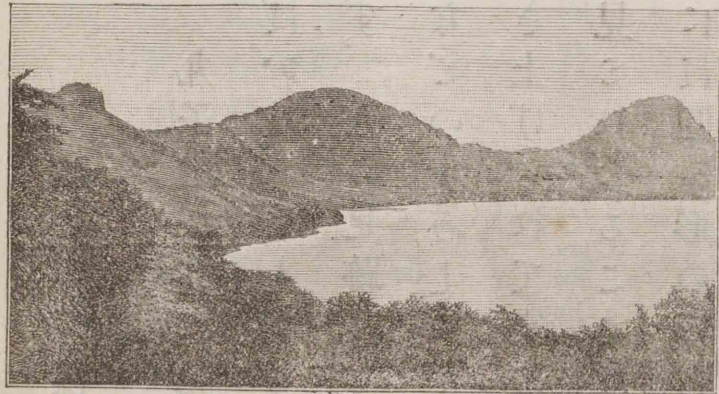
榛名湖 朱華表の傍立錐の地さゝやか

なる掛茶屋あれど人なし。顧

みれば、周圍一里ばかりの榛名

湖、堅氷結びて一大明鏡を開け

り。相馬山や、榛名富士や、烏帽



すいんちん形

子岳や、鬢櫛山や、硯岳や、掃部岳や、湖をめぐりてそれ

ぞれ秀容をあらはす。湖畔鹿角の如き枯木の間、

五六の人家點綴して一縷の煙のたち昇るも淋しげ

なり。前を見れば、谷深くして、兩方に山高く聳ゆ。

その間、自然の一大扇半ば開かれて、上の方には、富士

淺間をはじめこし甲信の群山淡く描かれたり。下

の方には、武藏上野の山々濃く描かれたる中に、怪奇

なる妙義山殊に目だちて見ゆ。

下るこゝ數町、叫ぶが如き溪聲を聞く。天神峠の

朱華表を顧みれば、鼻孔はや天に朝す。眼界頓に一

かえに白く輝く

打つてし形定

谷に限られて、十町ばかり趣味なき路を下りしが、左に深き溪を隔てて葛籠岩を望むに至りて、一種の奇景またあらはれぬ。數十丈の大巖、下は大にして上は小に、累々として落ちんとして落ちず。その様鴨の首を延ばせるが如し。その側に具足岩あれど、これは山壁の骨をあらはせるものにて、さまで奇とするに足らず。路、溪と直ちに相接するに及びて、こゝに始めて榛名神社の裏門に達す。溪の面氷りて、水その下を流れて聲あり。溪身一落する處、氷缺けて清泉迸出す。狭き谷の溪畔巖側、また餘地なきまで

夏より形定

に祠宇巍然として立てり。神門に入らむとして先づ驚く、筍の如き大巖、直ちに門にそひて轟々として天を刺す。之を鉾が岳と稱す。門内、右に社務所あり。左に鉾が岳に接して雙龍門あり。八つ棟造りの建築精巧を極め、龍の彫刻神に入り、關羽と張飛との彫像相對して、英姿颯爽たるを覺ゆ。門を入りてまた驚く、祠後鉾が岳よりも更に高く大なる奇巖ありて、幾んど落ち來らむとす。之を御姿岩と稱す。恰も人の懷手して、首を前に傾けて立てるが如し。如何にして上りしにや、その肩のあたりに、幣帛の立

てるは、例の人を駭かさむとする神官の悪戯なるべし。拜殿は巖の直下にあり。本殿の半ばは巖腹に入る。祠宇かなり高けれども、なほ巖の四分の一にも足らず。巖の高大想ふべし。拜殿より連なりて、右手の前に國祖殿あり。更に國祖殿に連なりて、拜殿と相對して神樂殿あり。三字はほとんど凹字形をなし、後に峭壁を負ひ、前は溪に臨めり。結構壯麗にして、彫刻の精緻人目を眩惑せむばかりなり。神門を出でて行くこゝ數十間、小支溪に神橋かゝりて、朱欄、碧巖と相映ず。橋畔の巖を覗き岩と稱す。

小溪の兩岸、大巖相接して長く連なり、のぞけどもその盡くる所を見ず。橋を過ぐれば、左に袖すり岩あり。右にも大巖ありて、相觸れむとして觸れず。その間わづかに人を通ず。巖腹の凹みたる處に、賽神社の小龕を安置す。巖の中より滴るしづく、滴り滴りて、凍りて大氷柱をなし、小龕をかこみて白玲瓏たり。三重塔の側を過ぎ、老杉の間を歩きつくせば、左に溪を隔てて鞍掛岩を見る。小さく譬ふれば土瓶のつるの如く、大きく譬ふれば虹の如き奇巖なり。御祓橋を渡れば隨身門あり。やゝ荒れたり。門外、

今までの通り
し所をくり
返して書き

數十の茅屋、山中に一寒村をなす。この隨身門より
葛籠岩まで、凡そ十町、狭き谷あひにて、一道の清溪、白
玉を躍らし、兩方の山、多く骨を露はして、鞍掛岩、鉢が
岳、御姿岩、葛籠岩を最も奇とし、その他奇石、怪石一々
數ふるに違あらず。三重の塔、連なれる老杉、高さを
競ひ、畫橋、（白かたすまき）朱欄水に映じ、祠殿宏壯、丹碧、（まろ）燦然と
して、峭壁の間に光彩を放つ。自然の奇、人工の妙、よく
相配合して、誠に天下有數の靈境（スガタタ所）たり。（大町桂月）

九 露都の四季

(一) 冬籠

十一月になるに何處の家でも、二重の硝子窓を密
閉し、嚴重に目張りをして、冬籠の仕度をする。寒さは
日増しに強くなつて、十一月の末から灰のやうな
粉雪が降り始める。往來の雪が堅く氷ると、馬車は
一様に橇と變る。それから五月の初までは、明けて
も暮れても雪の世界である。その代り雪が降り出
すと、天氣は割合に明るくなつて、時には朗かな日光
に浴し得る日もある。一番寒いのは矢張り一月か
ら二月へかけてである。暖國の日本人が露西亞へ

行つたら、凍え死にでもするか、のやうに言ふが、そんなことはない。日本人は決して露西亞の寒氣に堪へられぬ人種ではない。露西亞の家屋は防寒のため、特殊の用意がしてある。壁の厚さが二三尺以上四尺もあつて、室内は絶えずスチームや露西亞特有の暖爐で、何所の家も同じ温度に暖めてあるから、先祖代々バラツク式の隙間だらけな小屋に住んで、紙一枚の障子で寒風を防いで、火鉢の螢火で僅かに手先を温めて育つて來た日本人から見ると、冬の露西亞の家屋は温室の様に暖い。着物も日本の冬の

やうに厚着の必要はない。自分は夜分部屋に居る時は、手拭染めの浴衣一枚に襦袍を羽織つて、夜更けまで讀書するのが常である。併し半年以上も窓を閉め切つて、盛んに火を焚くのであるから、室内の空氣は非常に不潔である。それがやがて露西亞人に肺患の多い原因なのであらうと思ふ。

けれども、露都のシーズンは冬である。帝室附の三大劇場を始め、市中小の劇場や寄席その他の興業物は、一様に十月一日に開場して五月十五日まで續けるのである。あらゆる社交的の集會も冬のシ

ーズンに催される。芝居歸りの夜更けに、毛皮の中から眼ばかり出して、雪のネウスキー通りに橇を飛ばすところ、はじめて露西亞氣分が味ははれるのである。

(二) 一陽來復

半歳の冬籠を終へて、四月の耶蘇復活祭を迎へる頃は、まだ寒さも強いし、雪も降るが、あこ一月で春の草木も芽ぐむこいふ楽しみから、沈鬱な露西亞人の顔にも活々とした希望の輝が見えて來る。雪も寒中の灰のやうな粉雪ではなくて、東京で降るやうな淡

雪が降つて來る。四月になつてこの淡雪が降り出すと、露西亞人は春の音信と悦び合ふのである。

五月の初になると、一面に凍つた往來の雪もそろそろ解け初める。三四尺も張り詰めたネバ川の厚氷の上に架つた冬の橋が撤せられると、川の氷が解け出して氷河のやうに流れる。大きな氷の島が流れて來ては、橋脚に當つて碎けるのを見て居ると、なかなか壯觀である。自分は毎度暢氣な露西亞人と同じやうに、何時迄もトロイスキー橋の上に立つて、それを眺めるのであつた。一度ネバ川に氷が見ら

れなくなつて四五日するに、上流の寒地から流れて
來る氷で、又もや水の流が見えなくなる。それも四
五日で氷が流れてしまふといふ、春である。半
歳の間雪に閉ぢられて居た枯木立は、思出したやう
に一齊に若葉の緑を粧うて、短い夏に後れまいと大
急ぎに生育する。人間もそればかりに毛皮の外
套を脱ぎ捨てる。氣早の婦人は流行の夏衣や夏帽
の身輕な姿を町に見せる。生物蘇生、一陽來復等の
形容は、長い冬の眠からさめた五月の北露西亞の氣
分を遺憾なく言ひ現して居る。

(三) 白夜

花の咲く樹に乏しい露都では、春が來たまで花を
賞する樂しみはない。唯一つ北歐の名物シリंगा
が、白や薄紫の可愛い花に妙なる芳香を湛へて、公園
や邸の庭に咲き亂れる。五月の半ばには大小の劇
場が一齊に閉場して、公園の夜の遊場が開場される。
洒落者はパナマや麥稈帽子を冠る。日は次第に延
びて八時や九時では晝間と同じである。六月の末
から七月の末へかけて、名物の白夜が來る。夜の

時頃一寸薄暗くなるだけで、殆ど夜の無い世界となる。夜間でも燈火なしに讀書が出来る程で、何時寝てよいか見當が附かぬ。遊び好きの露西亞人は、日の暮れぬを善いことにして、二時三時まで遊び歩く。公園の遊び場の演藝などは、十一時過ぎに開場して二時過ぎまでやつて居る。公園の遊びに飽き足らぬ連中は、二時過ぎから更に馬車をエラーギンの森に飛ばして、夜もすがら森の公園を散策するものもある。六月になれば中流以上の者は、我勝ちに田舎の別墅地へ避暑に出かける。ネウスキーを歩いて

も、流行を競つた男女の往來が目立つて少くなる。日光に浴し得る愉快な季節は、五月の末から八月一杯で終を告げて、九月から又陰鬱の天地となつて、又熊のやうな冬籠の生活に入るのである。

(正親町季董)

一〇 莫斯科と那翁

莫斯科といふとすぐ那翁を連想する。ナポレオン、ボナパルトの名が、露西亞人の頭に深く刻み附けられて居ることは、朝鮮人に於ける加藤鬼上官以上

である。若しそれ莫斯科に至つては、當年那翁のため
 めに非常な苦痛を嘗めさせられて、現に那翁に關す
 る色々の記念物や遺蹟が残り居るだけに、一層強
 い印象が遺傳的に傳はつて居るのである。得意満
 面の那翁が、雀が岡から莫斯科の市街を展望して居
 る圖、沈痛の氣に満ちた那翁が幕僚を従へて、宮殿の
 廊臺ブルコニに立つて、莫斯科の大火を眺めて居る圖、悄然た
 る那翁が例の白馬に跨つて、雪の莫斯科を落ちて行
 く圖等の油繪の複製や繪葉書は、那翁の種々の彫刻
 像と共に、市中到る所の文房具店、繪葉書屋の店頭を

鳥居の形



莫斯科

飾つて居る。商店の繪
 看板や商品の商標に、那
 翁の肖像を描いたのも
 澤山あるのである。
 莫斯科郊外の雀が岡
 は、一世の英雄那翁がそ
 の生涯を通じて忘れ得
 なかつた思出の遺跡の
 一つであつたらう。莫
 斯科の市街から南の方

六露里、モスクワ河が大きくうねつて流れて居る畔に連なる一帯の丘陵がそれである。自分が雀が岡に遊んだのは、九月の初、空清く澄み渡つた日の晝頃であつた。ホテル、ナシヨナルから、態々自動車をゆるく走らせて、小一時間もかゝつて行つたのである。

市街を出離れると、路の兩側の別荘風の邸の様子が、さながら二昔前の大久保が巢鴨の梯を偲げせるのであつた。板塀や土塀で取廻して、玄關前に廣く庭を取つた木造の平屋が若しくは二階建の屋敷が

*_二、_一共に東京市の郊外。

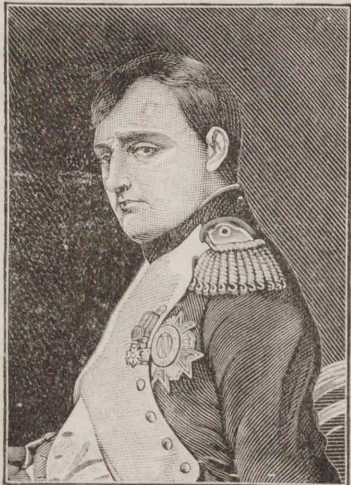
立並んで、庭には家鴨や羊が静かに遊んで居る。露西亞固有の赤や青の襦衣を着た下男が、白の前掛に頬かむりの下女と話をして居る長閑な光景には、思はずうつそりして眺め入るのであつた。車はやがてだら／＼坂にかゝつた。それが雀が岡である。有名な料理店クリンキン亭の玄關に車を乗り捨てた。

亭は百餘年前に那翁が始めて莫斯科を展望した遺跡に建てられてある。白堊塗の木造二階家で崖にさしかけて廣い廊臺が設けてある。其の欄に倚

つて眺めるに、モスクワ河は帯のやうに大きくうね
 つて、岡の裾をゆるく流れて居る。青い野菜畑は、モ
 スクワ河を挟んで、遙に市街に連なつて居る。青い
 畑を前景にした莫斯科の市街は、層氣樓のやうに秋
 の空に浮かんで、宛然一大パノラマである。市中で
 一番大きな救世寺の大伽藍をはじめ、大小四百五十
 寺院の高低着色種々な高塔や宮殿の城壁や、赤く白
 く塗つた大小の建築物やがやゝ霞んで、一幅の繪卷
 物のやうに眼下に展開されて居る。

百餘年前に、那翁がはじめて此處から莫斯科の市

街を展望したのも、日こそ違へ、同じく九月の初であ
 った。其の時那翁の眼に映じた莫斯科も、恐らく今



那翁

自分の眼に映じたものこ
 同じ色彩であつたらう。
 一千八百十二年九月十四
 日、那翁が懸軍萬里の遠征
 に疲れ果てた大軍を率ゐ
 て此處まで辿り着いて、始めて眼下に展開する此の
 美しい莫斯科の市街を眺めた時に、彼の眼は得意と
 希望に輝いたであらう。彼は疲れ切つた將卒を顧

みて、見よ、美しき莫斯科は装を凝らして我が軍を迎へて居る。美酒佳肴、歡樂の天地は我等の到るを待つて居るぞ。と豪語した。將卒も長途難行軍の疲も忘れて、皇帝萬歳を唱へたであらう。此處英雄得意の絶頂であつた。所が那翁の得意の鼻は手もなく取挫がれてしまつた。那翁が隊伍堂々莫斯科に入城して見るこ、一兵の支ふるものもない。廣い莫斯科の市街には人つ子一人居る氣配もない。莫斯科はも脱けの殻であつた。那翁の眼は疑惑に輝いた。美酒佳肴所か、一片の肉、一斤のパンも求め得られな

かつた。將卒の失望思ふべしである。露西亞人は十八番の豫定の退却を試みたのである。間もなく莫斯科全市に涉つて大火災が起つた。那翁は宮殿の廊臺で齒がみをして口惜しがつた。雪は降り始めた。飢餓と寒氣に對しては、勇敢な那翁の軍隊も手の出しやうがない。將卒の失望は不平怨嗟の聲こなつた。痛恨の涙を呑んだ那翁は、疲れた兵を率ゐて、悄然莫斯科を落ちた。隊伍は亂れて散々の體である。灰の様な恐ろしい吹雪は、行惱む那翁の大軍に、手痛い追撃戦を加へるのであつた。今、雀が岡

に立つて一千八百十二年の昔を回顧すると、英雄の
靈魂今も此の岡の邊に彷徨するかと思はれるので
ある。

(正親町季董)

対馬の雀
一一 雀

細かな春の小糠雨が、猫柳の銀色の毛に沁み附き、
池の畔の古い柳が青い芽を吹く彼岸前後になると、
百姓も蓑笠を着け、馬犁を押して、しつ／＼と馬を追
ひながら、急に青みを増した水田の中をちやぶちや
ぶと犁いたり、水滴を跳ね散らしたりします。さう

いふ姿が彼方の田にも此方の田にも、春の小雨に霞
んで往つたり來たりしてゐる。それは奥床おくどしいも
のです。蛙ももうころ／＼と咽喉を鳴らし始めて
おます。燕も幾百羽となく群がつて、水にすれ／＼
に飛び翔つておます。さういふ時、雀も傍の枝垂柳
や破れかけた枝折戸の上などで、巢立つたばかりの
可愛い頭を並べて、物珍しさうに羽翼を搔いたり、尻
尾を振つたりしておます。時たま馬が静しみにしみに
その下の萌出た野茨の垣根に近づいて、思はず太い
嚏をするこ、雀は驚いて轉げ落ちたり、飛び立つたり

します。

春が過ぎて、野川の邊などに、白い野茨が咲き盛るこ、雀の子も稍大きくなつて、眞白な胸の胴衣をこれ見よがしに翼を開いては眞直に上向きに羽ばたいたり、飛びつきかけては飛び立つたり、縋りついたり、尻尾を逆様にひつくり返つたりします。それをまた無邪氣な悪戯好きの小犬が追つかけてたり、逃げたり、それは賑やかな初夏の涼しさになります。

さうなるこ百姓達も、男も女も總出で、新しい菅笠

の田植姿こなつて、水田の中に白い鶺鴒の鳥のやうに並んで蹲むこ、雀も亦緑色の畦路などへ來て蹲んだり、雨でも降る日には、蓑笠婆の鍬でも擔ぎさうな姿で歩いたり、水田にばちやばちやこ羽搏いたりします。

日が暮れかけて、細かな雨が次第に明つて來て、匂はしい紅みがさしかけたと思ふこ、青い早稻田の空には、思ひ掛けない七色の虹の弧が、裾の方まで鮮かに架け渡す、素晴らしい景色に出逢ふ事もあります。圓い菅笠の幾つかも一齊にそれを見上げます。

木々に歸りかけた雀の喜も一通ではありません。葛飾の私の紫煙草舎でも、偶さういふ風景の下に光り耀くやうになつた事がありました。廂から落つる雨の雫も七色に染まつて、燦々しておました。そのまた雨垂に雀が驚いて羽搏きしながら、縋り附いたり、飛沫を散らしたりするのです。その雀も光り耀くばかりに見えましたが、それを眺めてゐる私達も思はず恍惚とした靈感に打たれて、身體も心も光るばかりに覺えました。

物見と見ると
るほる、

庭の澁柿が赤く色づく頃から、私の草舎はまるで雀のお宿見たいになつてしまひました。葛飾田圃の雀はその赤い澁柿ばかりを目がけて四方から群がつて来るやうでした。さうして澁柿が愈腐れて落つれば落つるほど、集まつて来る雀の數は愈多くなるばかりでした。寒さも愈寒くなりました。後にはその枝にたつた一つしか赤い實は残つておません。さうなるま今度は雀が鈴なりになつてしまひました。人家の傍の田を作るものでは無いといふ話です。

見渡す限りの稲の穂波が愈々黄金色に色づいて、晩秋の風にさわく、と揺れ立つ頃になると、所謂千羽雀の時節になります。その雀の数の多い事は全く千羽雀といつても千羽位の數ではありません。何千何萬とも知れぬ雀の群集が、彼方にも此方にも、黒胡麻のやうに亂れ落ちたり、飛び上つたり、遙の空から稲の穂波とすれく、に金色に競つて光つて、羽搏き羽搏き、なだれて來るかと思ふと、思ひ掛けない近くの田圃から、また入れ代りに擾れ立つて逃げたり、または専念に向ひ風に羽搏く雀、激しく吹き分けられ

て二羽三羽と方々へ外れて、向きく、に頭を縮めて羽搏く雀、たつた一羽になつて翼を細かにちぎれるほど振りきつて、何處へ行くとも知れず、小さく飛んで行く雀、さういふのが唯の一羽でも鳴き立てぬ雀は無いのだから、その騒がしさ、喧しさといふものはないのです。取分けて赤いく、太陽が本所邊の濛濛と煙つてゐる幾百とも知れぬ大煙突の向うに落ちかゝつて、西方一面に赫々と赤く反照する日の暮れ時の群雀の姦ましさは、全く耳が金聾になるばかりでした。

百姓達はたまらなくなつて、ほうくこ田圃へ出て追つてはねますが、その聲の淋しい事こいつたらありません。追はれる雀は利口です。自分達の下りてゐる田から一番近い家の庭の樹立を目がけて逃げて來るのです。ほうくこ羽音を立てて、まるで驟雨の襲うて來る惶急しさで、一時に逃げて來ます。そして樹の上で、一しきり鳴き騒ぎながら、一つには様子を仔細に觀、二つには疲れを休めて、新しい元氣を附けるこ、また向うへ行つた百姓の後から、元の田へ一齊に飛び下りる。また追はれて逃げて來

るこいふ風です。それが朝から晩までだからたまりません。逃場所のある家の近くの田圃などは一番に荒らされてしまふわけです。

此の時節こそ雀の一年中の收穫時であつて、雀は全く欣喜雀躍です。少々遠くの都會からでも、この頃は晝は總出て出稼に來ます。葛飾で無くとも、田圃のある限り、雀はそこらの電線や木の上に鈴なりです。

赤い夕燒の空に火の見梯子が遠見に染まり、近くの電線に雀が尻上りや肱立ちをやつたり、まるで機

械體操か輕業見たいな身振りて、前後も知らずに踊り返つてゐます。

愈寒い冬の日が近づくと、道端に架け渡した、掛稻の上に何羽もなく雀が日向ぼつこを始めます。

村社の壊れかけた石の鳥居や、色の褪せた赤い鳥居にも、稻束が掛け連ねてあると、その上には雀が行儀よく一列に並んで、刈り盡くして曠々となつた田圃續きを眺めたり、落穂拾ひの寒々しげな姿を見下したり、遙に天の一方に眞白くなつた富士の山の神

神しさを仰いだりしてゐます。

ともするに、非常によく晴れた日などは、稍小高みの丘の祠の千木の頂邊に、一羽の雀が、ちよんここまつて日和見をしてゐる、澄み切つた姿さへ見受けま
す。さうして幾日か寒々しい日が續くと、愈、雲まじりの粉雪が降つて來ます。さうして百姓もちぢかめば雀もちぢかんで、何時の間にか自然にお爺さんくさくなつてしまふのです。

(北原白秋)

一二 板倉父子

(一) 勝重

天正十六年、徳川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中より擇び給ひて、勝重召して此所の町奉行に任せらる。

初、勝重を召され、此の職のこそ仰せ下されしが、其の任に堪へざる由申して、固く辭し申しけれども、更に御許しなし。「勝重さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものこそ謀りてこそ、御返事をば申すべけれ。」と申す。徳川殿笑はせ給ひて、「さもありなん。」罷り歸りて相謀れ。と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶ

べきことありと告知らす人あり。如何なる幸か候。」といひけるに、勝重物をもちはず、ほくそゑみて衣裳ぬぎ棄てて座に直り、妻に打向ひ「されば、今日召されしこそ、餘の儀にあらず。此の度御座所を移さるゝによつて、彼の町の奉行たるべき由を仰せ下さる。如何にも叶ふべからざる旨を申せども御許しなし。さらば我が家に歸り、妻に謀り候はん」と申して罷り歸りぬ。さてお事は如何にか思ふ。といふ。妻は大いに驚きて、「あな、淺まし。私事などならば夫婦謀る」といふ事もこそあれ。公にてかゝる事や宣ふべき。

まして是は仰せ下さるゝ所なり。殊に其の職に堪へん、堪へじは御心にこそあるべけれ自らいかて知り候べき。といへば、勝重、いや、我此の職に堪へん、堪へじは我が心一つのみにあらず、御身の心による事にて侍るぞ。まづ心を静めてよく聞き給へ。古より今に至り、異國にも本朝にも、奉行頭人などといはるゝものの、其の身を失ひ、其の家を亡ぼさぬは稀なり。或は内縁に就いて訴を斷るこそおほやけならず、或は賄賂によつて理を判つことに私多し。是等の災は婦人より起る所あり。我若し此の職に仕

奉らん後、
賄賂

へ奉らん後は、親しき人の言ひよらん事なりとも、訴訟の事執し給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候事ありとも、苞苴のもの受け給ふまじきか。是等の事を始めとして、お事は勝重の身の上、如何なる不思議の事ありとも、さし出て物のたまふまじきよし固く誓ひ給はざらんには、勝重此の職に任ずる事は、いかにも叶ふべからず。さればこそ御身を謀るべし。こは申したれ。といふ。妻つくづく打聞いて、誠に宣ふ所こそわりにこそ侍れ。自らは如何なる誓をも立てなん。こく參りて畏まらせ給へ。といふ。勝重

大いに悦びて、神にかけ、佛にかけて、固き誓立てさせ
て、此の上は思ひ置く事なし。さらば參らんこて、衣
裳引きつくろうて出づ。

袴の後腰をもちりて着たりけるを、妻後さまに見
て、袴の後悪しう候。こいうて、立寄りて直さんこす。
勝重聞きもあへず、さればこそ、我が妻に謀らんこ申
ししは過たざりけれ。勝重が身の上の事、如何なる
不思議ありとも、さし出て物言はじこ誓ひしは今の
程ぞかし。早くも忘れ給へりな。此の定ならんに
は、勝重職承るここ叶ふべからず。こて、また衣裳脱ぎ

捨てんこす。妻大いに驚き悔いて、さまさまの怠狀
まねらす。「さらば、その言葉、何時までも忘れたまふ
な。こいひて、御前に參る。徳川殿如何に。汝が妻は
何こかいひし。こ仰せければ、妻にて候ものが、愼みて
承れこ申し侍る。こ申す。「さこそあらめ。こて、大いに
笑はせ給ひしこなり。

(二) 重宗

重宗は勝重が嫡男なり。元和六年三十五歳にて、
父が薦に依つて京職に補せられ、職に在りしここ三
十餘年、人の敬ふここ神明の如く、愛するここまた父

母に似たり。父も子も同じ名臣にて、君の寵恩最も深かりけり。

重宗職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にして、遙に拜するここありて決斷所に至る。此所には茶磨一つを据ゑ置き、明障子を引きたててその内に坐し、手づから茶ひきながら、訴を聞分つ。人皆この事どもを不審しあへり。されども、問ふことも得ならずして過ぎぬ。遙に年経て後、問ふ人のありしに答へて曰く、まづ決斷所に出づる時に、西面の廊下にて拜するここは、愛宕の神を拜するなり。

多くの神の中に、殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きしほどに、所願ありてかくは拜しぬ。その所願といふは、今日重宗が訴をこころわらん、心に及ばん程は、私の事あらじ。若し過ちて私の事あらんには、立ち所に命を召され候へ。年頃深く頼みまゐらする上は、少しも私心あらんには、世に永らへさせ給ふなご、日毎に祈誓するにて候。また訴を判つ事の明らかならぬは、我が心の事に觸れて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は自ら動かさざらんやうこそあらめど、重宗それまでの事は叶ひ難し。ただ我が心の

動くこ靜かなるこを、試みるには、茶をひきて知る。心定まりて靜かなる時は、手もそれに應じて磨の廻るこ平かにして、きしられて落つる所の茶いかにも細かなり。茶の細かに落つる時に至りて、我が心も動かぬを知り、その後漸くに訴を判つ。又、明障子を隔てて訴を聞くこは、凡そ人の面貌を打見るに、憎さげなるあり、憐がましきあり、またかたましきあり、その品多くして幾何こいふ數を知らず。見る所の誠しきこ思ふ人のいふ事は誠こ聞かれ、かたましきこ見ゆる人のなす事は、何にても皆詐こ見ゆ。又

憐がましき人の訴は、曲げられたる所あるよこ思はれ、憎さげなる人の争は僻事ならんこ覺ゆ。これ等の類は、我が目に見る所に心の移されて、彼が言葉を出さぬ内に、ばや我が心の内に、邪ならん、正しからん、曲れるならん、直からんこ思ひ定むる程に、訴の言葉を聞くに至りては、我が思ふ方にその事を聞きなすここ多し。訴のなるに及びては、あはれがましきに憎むべきあり、憎さげなるに憐なるあり、誠しきに偽りかたましきが多きここ、この類多し。人の心の知り難き、容を以て定めんここ叶ふべからず。古の訴

を聽くには、色を以て聽くことあり。それは覆はるる所なき人の事なるべし。重宗が如きは、見る所について心覆はるゝこと多し。又さなきだに、訴の庭に出でんには恐ろしかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、まばゆく、いぶせて、自らいふべき事も得いば、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬに若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候。こ答へしとなり。

(藩翰譜)

一三 鬼作左

豊臣秀吉
徳川家康

三河の國額
田郡の居城
氏
本多作左衛門
の臣、徳川氏

秀吉の母

關白殿、いかにもして、徳川殿と親しうならんこと、色に、謀を廻らし、やがてまた、その妹君を徳川殿の北の方に参らせられしかば、徳川殿この上は見参なくてはかなふまじとて、御上洛あるべきに極まる。「御家人等が危く思はん所も侍る故、御逗留あらんほどは、それに留めさせ給ふべし。」とて、大政所を下し給ひしかば、岡崎の城に入れ参らせ、重次これを守る。この時、重次下知して、大政所のおはしますほこりに、薪を積むこと山の如し。こはをも、いかなることぞと驚き、大政所の御供なる女房達、はした女して、薪

積む下部男一人招き、酒など飲ませ、能く心を取りて、さて、何事にか、この程、日々にかく薪をば積むは、「こ問へば、いかなる事とも、いかで下郎は知り申さん。但し、承る所は、關白殿の我が國の殿を失ひ給ふか、若しくは留め參らせて返し給はずば、今度都より御下りあつて、これにまします御方を盡く焼き殺し申さん料の薪。こかや申して、本多殿の下知として、日々に山林より伐りて來り候が、この本多殿を申すは、極めて氣の短き人にて、殿の御歸り遅し、こ待ちかねて、今朝火を附けう、晩に焼き立てうこそせらるゝを、井伊

直政*

忠世*

殿や、大久保殿が、暫し、こ制し給へばこそ、今まではかくて候へ。『いたはしや、美しき都上藤の、今の中にも灰土にならせ給はんこよ。』こ下郎どもは申すこにて候。こいへるを、女房達にかくこ告ぐれば、あな悲しや、その本多こいふ男が、日々に參りて、恐ろしげなる聲音にて、家康よりこゝに附け參らせて候。御用の事あらば承りなんす。こいふを、今思ひ合はすれば、三河守殿の、始めて御參りありし時、仙千代丸こいふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、あれは家康が家にて、三奉行こいふ中の鬼作左衛門こいふ者

結城秀康、
家康の子、
秀吉の養子
となる。

の子ぞ。こ仰せありしかば、おそろし、おそろし、鬼も子を生むにや。鬼の子はいかなる者にか。こて、物越しに人々見たりしに、その親の鬼ならば、さこそあらめ。さればこそこれへ参る度毎に、家康歸り候はんこのことは、まだ御沙汰も聞え候はぬにや。こ一昨日もいひしぞ、今朝も、昨日もいひしぞ。待遠にや思ふらん。あはれ、家康、こく返させ給へかし。こ歎きくごきて、この由を大政所へ申しければ、大いに驚き給ひて、日々に御消息ありて、徳川殿をこく返させ給へ。こなたの有様のいぶせさ、いつの世にかは忘るべき。など、あ

秀吉*の妹

りし事ども、細々こ仰せ遣はされけるほどに、程なく御歸國ましまし、大政所歸り上らせ給ひければ、女房達涙を流し、情なくも、御母上を下し給ひしものかな。鬼作左が、かくこそいひけれ、こそ計らうて候ひけれ。今は朝日*の姫君を参らせ給へば、徳川殿の御爲にも、大政所は御母上にて候を、いかに鬼なればこて、己が主の事知らぬこや候べき。それにかく辛き目見せ参らせて侍れば、はやく、徳川殿に仰せられて、いかなる罪にもあはせて、大政所の御恨をも晴らさせ給へ。こ、こりどりに訴へければ、關白殿は笑はせ

給ひて、家康はよき者ども、あまた召し使ひけり。秀吉もその如き家人をば欲しきここに候ぞや。ごばかり宣ひて、御座を立たせ給ひきこなり。
(藩翰譜)

ㄨ四 新年の葉書

吾輩は此の頃多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜられるのは有難い。

元朝早々主人の許へ一枚の繪葉書が來た。是は彼の交友某畫家の年始狀である。上部を赤、下部を深緑で塗つて、其の真中に一つの動物が蹲つてゐる

所をパステルでかいてある。主人は例の書齋で、此の繪を横から見たり、豎から眺めたりして、うまい色だなこいつた。既に一應感服したものだから、もうやめにするかと思ふと矢張り横から見たり、豎から見たりしてゐる。體を拗ぢ向けたり、手を伸ばして、老人が三世相を見るやうにしたり、又窓の方に向つて鼻の先まで持つて來たりして見てゐる。早くやめてくれないと膝が揺れて危険でたまらない。漸くのところで、動搖が餘り劇しくなくなつたと思つたら、小さな聲で、「一體何をかいたのだらう。」こいふ。主

人は繪葉書の色には感服したが、かいてある動物の正體はわからぬので、さつきから苦心してゐたものと見える。

そんなにわからぬ繪葉書かと思ひながら、つぶつてゐた眼を上品に半ば開けて、落ちつき拂つて見る。紛れもない、吾輩の肖像だ。畫家だけに形體も、色彩も、ちやんと整つて出來てゐる。誰が見たつて猫と見るに相違ない。少し眼識のあるものなら、猫は猫でも、他の猫ぢやない、吾輩であることが、判然とわかるやうに立派にかいてある。此の位明瞭な事が

わからずに、斯くまで苦心するかと思ふと、少し人間が氣の毒になる。出來る事なら、其の繪は吾輩であるといふことを知らしてやりたい。吾輩であることはよしわからないにしても、せめて猫であるといふことだけはわからしてやりたい。しかし、人間といふものは、到底吾輩猫屬の言語を解し得る位には、天恵に浴して居らぬ動物であるから、殘念ながら其の儘にして置いた。

一寸讀者に斷つて置きたいが、元來、人間に何ぞこいふと猫々こと、事もなげに輕侮の口調を以て、吾輩を

評價する癖のあるのは、甚だよくない。人間の糶から牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造されたやうに考へるのは、自分の無智に心付かずに高慢な顔をするものには有り勝ちな事でもあらうが、側から見て餘り見こもよいものぢやない。いくら猫だつてさう龐末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一體、平等無差別に、どの猫も固有の特色などは持たぬやうであるが、猫の社會に入つて見ると、なかく、複雑なもので、十人十色といふ人間界の語は其の儘ここにも應用が出来るのである。目付でも、鼻付でも、

毛並でも、みんな違ふ。髻の張り工合から、耳の立ち安排、尻尾の垂れ加減に至るまで、同じものは一つもない。器量不器量、好き嫌ひ、粹無粹の數を悉くして、千差萬別といつても差支はない位である。其の様に判然たる區別が存してゐるにも關らず、人間の眼は只向上さか何さかいつて、空ばかり見てゐるものだから、吾等の性質は無論、相貌の末をも識別する事の出来ぬのは氣の毒だ。同類相求むる事は昔からある語ださうだが、其の通りだ。餅は餅屋、猫は猫で、猫のここのなら、矢張り猫でなくてはわからぬ。いく

ら人間が發達したとて、是ばかりはだめである。況や、實際をいふと、彼等が自ら信じてゐるほど、人間はえらくも何も無いのだから、猶更むづかしい。又況や、同情に乏しい吾輩の主人の如きは、相互を残りなく解するところが、愛の第一義であるといふことすらわからない男だから仕方がない。彼は性の悪い牡蠣の如く書齋に吸ひ付いて、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。それで自分だけは頗る達觀したやうな面構をしてゐるのは一寸をかしい。達觀してゐない證據には、現に吾輩の肖像が眼前にあるの

に、少しも悟つた様子もなく、今年征露の第二年目だから、大方熊の畫だらうなどと氣の知れぬことをいつて濟ましてゐるのでもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をつぶりながら、斯く考へてゐると、やがて下女が第二の繪葉書を持つて來た。見るに、活版で、舶來の猫が四五匹ずらりと行列して、ペンを握つたり、書物を開いたりしてゐる。其の内の一匹は席を離れて、机の角で、西洋の「猫ぢや猫ぢや」を踊つてゐる。其の上に日本の墨で「吾輩は猫である。」と黒々と書いて、右の側に「書を読むや踊るや

猫の春一日。こいふ俳句さへ認めてある。是は主人の舊門下生より來たので、誰が見たつて、一見して意味がわかる筈であるのに、迂濶な主人はまだ悟らない。こ見えて、不思議さうに首を捻つて、はては「今年は猫の年かな」と獨言をいつた。吾輩が是ほど有名になつたのを未だ氣がつかずにゐるこ見える。

所へ下女が又第三の葉書を持つて來た。今度は繪葉書ではない。「恭賀新年」とかいて、傍に「乍恐縮彼の猫へも宜しく御傳聲奉願上候」とある。如何に迂濶な主人でも、かう露骨に書いてあればわかるも

のこ見えて、漸く氣がついたやうに「ふん」といひながら、吾輩の顔を見た。其の目付が今までとは違つて多少尊敬の意を含んでゐたやうに思はれた。今まで世間から存在を認められなかつた主人が、急に一個の新面目を施したのも、全く吾輩の御蔭だと思へば、此の位の目付は至當だらうと考へる。

折柄格子戸が、チリン、チリン、チリ、ンミ鳴る大方來客であらう。

(夏目漱石)

一五 オリンピアの回顧

ペロポネソス半島、エリス州中の平原。又ゼウス、又デユピターともいふ、希臘神話中の萬物を主宰する神。
 パンヘレニツクは全希臘のといふ意。
 亞弗利加にある希臘植民地の一。
 シンリ島東海岸の都市。

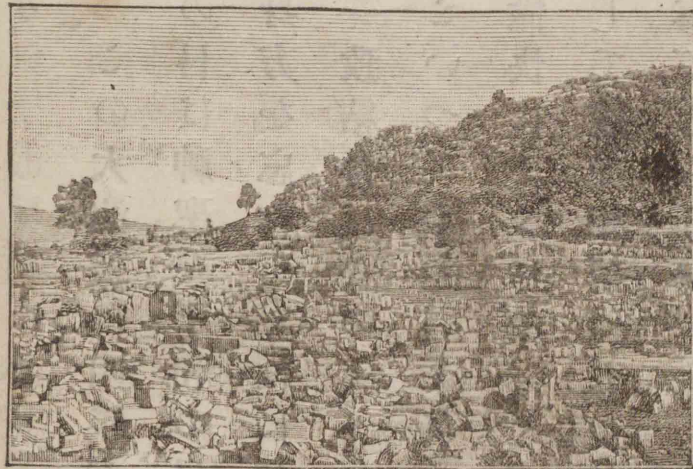
オリンピアのゼウス神はパンヘレニツクの神、希臘全土の信仰を得た神である。四年に一度の祭日には、南は亞弗利加のシリーン、西は伊太利のシラキユース、東は小亞細亞のあたりまで、苟も希臘人の住んでゐる處からは、幾千幾萬の人々が、こゝにつどひ來たのである。オリンピアの廢墟の奥に、一部分のみ發掘された演技場の址は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔦蘿高く繁り合つて、羅馬時代に建てられた凱旋門の半ば壞れたのに絡はるのだが、如何にも名譽の月桂冠であるかのやうである。

この大演技は四年ごこの大祭日に催された。この日は神聖な平和の日として、希臘全土の人々が敵身方を忘れて、これに列したのである。希臘全土の一致結合は、このオリンピアの演技によつて出來たといつても過言ではあるまい。國民全體が面白く愉快にこゝに集まり、各州の選士が雲を呼び風を起して、龍虎相搏つたのは、如何に壯快に、目覺しかつた事であらう。

集まつて來た人々の中には詩人もあつたであら

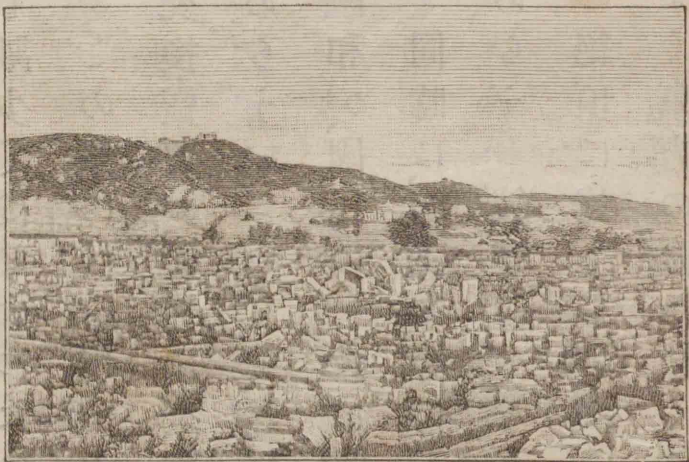
歴史家の祖 耶蘇紀元前
四百年から十
四年頃まで五
にわたる人。
希臘アテネ
の雄辯家
（前三八五
—三二二）
アテネの政
治家、將軍
（前五二〇
—四五三）

う、學者もあつたであらう。ヘロドトスの如き歴史



(一) 蹟遺アピンリオ

家も、デモステネスの如き
雄辯家も、テミストクレス
の如き勇將も、さては政治
家、法律家、富めるもの、貧し
きもの、名門も、平民も、あら
ゆる階級、あらゆる職業の
人々が、互に顔を合はせ、談
笑周旋して、その間を徘徊
したさまの、如何に面白く



(二) 蹟遺アピンリオ

單に演技そのものの進歩に役立つたのみではない。

哲學・歴史・戯曲・音樂・彫刻などの發達に影響したことも尠少ではなかつたのである。

この祭には市場が立つ事になつてゐた。物資の交換・賣買が、如何に全國の商業・農業を益したところであらうか。かくて、思想・知識の交換、延いては感情の融和が、國民の一致に暗々裡に貢獻する所があつた。と同時に、商工業等にも影響したものが多かつたであらう。彼等はペルシヤ戦争に於て、國民的敵愾心の絶頂に達したが、この時小忿を忘れて大敵に當り、よく東方の強を挫くことを得たのは、このオリンピック

ペルシヤ王
ダリウスの
子クセル
クセルスの
回互つて
企てた希臘
遠征をいふ
結局はシ

ペルシヤ王

ヤ軍戦敗れ
て志を遂げ
なかつた。

アの演技に負ふ所が少くなかつたであらう。しかも、その演技者は決して職業的の者ではなかつた、各州から出た青年選士であつた。そして羅馬時代に入り、職業的なものとなつた時は、はやこの演技の衰へ始めた日であつた。この演技の精神は、全國民をして眞の勇者たらしむるにあつて、全國民の體格・意志の發達は、この演技によつて益・助長されたのである。古代希臘に於ける教育のモットーは一言にて盡くす、健全なる肉體には健全なる精神宿る。これである。ただこの健全な精神を養成するため

*格言・箴言

に、健全な肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻にはこの意味が表れてゐる、文學にもこの意味が見えてゐる。

オリンピックの祭典は、かくて希臘の歴史はじまつて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連続した。その事蹟は、希臘の文化と共に、永久に亡びることにならう。我が國には、このオリンピック演技のやうなものは無用のことであらうか。我が固有の武術にせよ、各學校のベースボールにせよ、フットボールにせよ、相撲にせよ、各階級を通じ、各地方を通じ、

擧つて選士を出して、龍攘虎擊の壯快な競技を演ぜしめ、これを観るものも、また全國到る所から雲集する事の出来る一大演技場の無いのは、盛世の一大遺憾ではなからうか。余偶、オリンピックに遊び、雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草藜々たる演技場を徘徊して古希臘の文化の淵源する所はこゝに在り、と想到した時、端なく余の心耳に囁く天來の聲があつた。それは「我が國民の崇敬し信仰する伊勢神宮の邊に一大演技場を建てて、その大祭日に全國民の競技を演ぜしめよう。」といふのであつた。

(黑板勝美)

一六 士道と商業

世には士道と商業とは兩立すべからざるものと信ずる者多けれど、これ全く時代錯誤の謬見なり。商業を詐欺の一種と心得、度量衡の目を盗むを必要なる任務として公然これを演習するは、中世的社會の遺孽なり。

士魂は人類魂にして、武士道は人間道なり。商業も斬捨御免の範圍を脱し、人として人を相手とする

以上、士道を離れて成立し、發展し、繁昌すべからず。されば三四百年の訓練を經來りて、世界第一の商業國たる英の商人は、能く紳士道を守り、商人のみの集合體とも云ふべき倫敦市會の品位は、各種の職業者より成れる英國下院に優ること遠し。一諾に因つて千萬金を授受するを事とする商人は、其の信義堅からざれば取引成立せず。多年の經驗に依りて訓練せられたる英商は、算盤の上より紳士道の必要を體得して、信義を重んずること特に強く、従つて他邦人皆英商と取引するを好む。瑞西は時計の名産地

なれど、其の製品は英京ベンソン會社の極印あれば一割高く賣れ行くなり。英商には注文よりも寸尺分量を多くし、見本よりも上等品を送るの傾向あり。我が商人は之に反す。英の紳士道は日本の武士道と最も相近似し、共にこれ人類道の異名に過ぎず。士農工商皆人類たる以上、これに依らざる可からざれども、最も廣き地域に亘りて、最も多くの人に接するを要する商人たる者は、最もこれを守るの必要あるなり。

我が國に於ても、盛大なる産業を營む者は、皆士道を守れり。徳川時代奴隸的待遇の中に沈淪せる二百餘年なりしかども、老舗名商は依然として人間道を把持し、敢へてこれを毀損するを怖れ、信用を損し、店の暖簾にかゝる所業は禁物としたり。三井・三菱・藤田・鴻池・住友・澁澤等の祖先若しくは本人は、皆武門より出で、武士的教養を経たる者にあらずや。大會社の經營者は、概ね士族出身に非ざれば、則ち士的教養を受けたる者にあらずや。世界を相手の檜舞臺に立ちて、尙日蔭者たりし時代の町人的頭腦を以て、心得顔に士道を無視して瞞着を能事とするは、日中

の幽靈にも似て、醜態痴狀見るに堪へず。苟も人類の事業に關する者にして向上發展せんさせば、何ものか人間道に依らざるを得るものあらんや。

(尾崎行雄)

七七 自惚れ

三代將軍家光は、劔術の相手になるものが誰でも負けるので、己にはよく及ぶ者は無いと心得、力自慢で仕末に終へなんだ。そこで大久保彦左衛門が阿部豊後守をして之に一撃を與へさせたこと云ふ事が

傳へられてゐる。事實なりや否やは兎も角として、さう云ふ事は有り得べき事である。家光の劔術は知れたものであつたらう、之を捻ぢ伏せる力を持つた者は幾人でもあつたらう。唯恐れ憚つて負けて居るのを、好い氣になつて、己の手腕の勝つて居ると思ふのは馬鹿げきつた事である。さすがに家光は明君である。阿部豊後守にやつつけられて、一度は怒つたが、次いで己の力の及ばざるを悟り、深く慎むやうになつた。世には豊後守の一撃を受けずに、好い氣になつて居るものが、少くない。人の力で取り

立てられて居りながら、己の力で昇進したと心得、天下を我が物のやうに口幅つたい事を言ふのは、自らの愚を示すものである。何でも我が實力に應ずることを期すべきである。實力に伴なはぬ事を思つたり、企てたりするのは間違ひである。が、實力が何程あるかは、尺や秤で量ることは出来ぬ。實力に應ぜねばならぬとて、實力を量つた後でなくては著手されぬとすれば、何も出来なくなる。或程度までは何事も常識でわかる。出来さうな事と出来さうでない事とは差別し得られる。併し時として出来る

か出来ぬかわからぬ事がある。さういふ場合に出来ると思ふれば力が加はる事になる。確信は確に一の力である。出来るか出来ぬかわからぬのに、出来ると思ふのは自惚れであると言はれるにしても、出来るか出来ぬかわからぬのに、どうしても出来ぬと限るべきであらうか。出来るか出来ぬかわからぬのを、出来るとして取りかゝるのは、自惚れとしても善い自惚れである、自信力を發揮する自惚れである。出来る事でも、出来ぬと思へば出来ぬ。出来ぬと見えても、出

來るこ信ずれば出来る事がある。ナボレオンは不可能の語は愚人の辭典にある辭だと言うたこいふ。ピットもミラボーも同じことをいつたこ傳へられてゐる。併し不可能こ云ふ事はないこ信ずるが爲に、出來ぬこ見えた事も出來たのであらう。世に不可能の事の多いのは勿論である、人間の爲し得べき事は僅かであるが、實際に働く身分こしては、不可能の事がないこ信ずれば、他人よりも多く力を出すここが出来る。氣違ひ力こいつて、狂人は驚くべき力を有する。狂人でなくても、一心を籠めるこ、意外

に大いなる心身の力を發揮するこが出来るものである。
(三宅雪嶺の文に據る)

一八 意 地

細川越中守忠利の病んで逝くや、生前に許可を得て殉死したものが十八人あつた。近臣阿部彌一右衛門も亦殉死を願つたが、それは許されなかつた。十八人の死後、殉死に漏れた彌一右衛門は、人の己を嘲り笑ふ者あるを聞き、慨然として自殺し、以て忠利に殉じた。後主光尙は、之を喜ばない。十八人の遺族はそれぞれ厚遇したが、阿部家は罰として、彌一右衛門の俸祿千五百石を割いて、彼が一族に分配し、嫡子權兵衛には、其の一部分を與へた。權兵衛は之を不快に思つて、忠利の一周忌に方つて、其の牌前で髪を切つた。光尙大いに怒つて、權兵衛を絞殺した。これ武士として恥辱此の上もなき刑である。

阿部一族の者は之を恨み、今は討手を引受けて、潔く討死しようとする、兵衛の屋敷に立て籠つた。
(大町桂月)

寛永十九年四月二十一日は、麥秋によくある薄曇の日であつた。

阿部一家の立て籠つてゐる山崎の屋敷に討入らうとして、竹内數馬の手のものは、拂曉に表門の前に來た。夜通し鉦太鼓を鳴らしてゐた屋敷の内が、今はひっそりとして、空屋かと思はれる程である。門の扉は鎖してある。板塀の上に二三尺伸びてゐる夾竹桃の梢には、蜘蛛のいしが掛かつてゐて、それに

夜露が眞珠のやうに光つてゐる。燕が一羽どこから飛んで來て、つと塀の内に入つた。

數馬は馬を放つて降り立つて、暫く様子を見てゐたが、門を開けいさ云つた。足輕が二人塀を乗り越越して内に這入つた。門の廻りには敵は一人もゐないので、錠前を打ちこはして貫の木を抜いた。

隣家の柄本又七郎は、數馬の手のものが、門を開ける物音を聞いて、前夜結繩を切つて置いた竹垣を踏み破つて、駆け込んだ。毎日のやうに往來して、隅々まで案内を知つてゐる家である。手槍を構へて臺

所の口から、つゝ這入つた。座敷の戸を締め切つて、込み入る討手のものを一人々々討ち取らうとして控へてゐた一族の中で、裏口に人のけはひのするに先づ氣のついたのは彌五兵衛である。これも手槍を提げて臺所へ見に出た。

二人は槍の穂先と穂先とが觸れ合ふ程に相對した。

「や、又七郎か。」彌五兵衛が聲を掛けた。

「おう。かねての廣言がある。おぬしが槍の手並を見に來た。」

「好うわせた。さあ。」

二人は一步しさつて槍を交へた。暫く戦つたが、槍術は又七郎の方が優れてゐたので、彌五兵衛の胸板をしたゝかに衝き抜いた。彌五兵衛は槍をからりと棄てて、座敷の方へ引かうとした。

「卑怯ぢや、引くな。」又七郎が叫んだ。

「いや、逃げはせぬ。腹を切るのぢや。」言ひ棄てて座敷に這入つた。

其の刹那に、「をぢ様、お相手。」と叫んで、前髪の七之丞が、電光の如くに飛んで出て、又七郎の太股を衝いた。

入懇の彌五兵衛に深手を負はせて、覺えず氣が弛んでゐたので、手練の又七郎も少年の手に掛かつたのである。又七郎は槍を棄てて其の場に倒れた。

數馬は門内に入つて人數を屋敷の隅々に配つた。さて眞つ先に玄關に進んで見るに、正面の板戸が細目に開けてある。數馬が其の戸に手を掛けようとするに、島徳右衛門が押し隔てて、詞せはしく瞬いた。「お待ちなされませ。殿は今日の總大將ぢや。某がお先をいたします。」

徳右衛門は、戸をがらりと開けて飛込んだ。が、待ち

構へてゐた市太夫の槍に、右の目を衝かれて、よろよろと數馬に倒れ掛かつた。

「邪魔ぢや。數馬は徳右衛門を押し退けて進んだ。市太夫・五太夫の槍が左右のひばらを衝き抜いた。

添島九兵衛・野村庄兵衛が續いて駆け込んだ。徳右衛門も痛手に屈せず取つて返した。

此の時、裏門を押し破つて這入つた高見權右衛門は、十文字槍を揮つて、阿部の家來共を衝きまくつて座敷に來た。千場作兵衛も續いて込み入つた。裏表二手のもの共が入り違へて、をめき叫んで衝

いて来る。障子襖は取り拂つてあつても、三十疊に足らぬ座敷である。市街戦の惨状が野戦よりも甚だしい。同じ道理で、皿に盛られた百蟲の相啖ふにも譬へつべく、目も當てられぬ有様である。

市太夫・五太夫は相手嫌はず槍を交へてゐるうち、全身に數へきれぬ程の創を受けた。それでも屈せず、槍を棄てて刀を抜いて切り廻つてゐる。七之丞は、いつの間にか倒れてゐる。

太股を衝かれた柄本又七郎が臺所に伏してゐると、高見の手のものが見て、手をお負ひなされたな。

お見事ぢや。早うお引きなされい。」と云つて奥へ通り抜けた。

「引く足があれば、わしも奥へ這入るが。」と、又七郎は苦々しげに云つて齒咬をした。そこへ主の跡を慕つて入り込んだ家來の一人が駈けつけて、肩に掛けて退いた。

今一人の柄本家の被官天草平九郎といふ者は、主の退口を守つて、半弓を以て目に掛かる敵を射てゐたが、其の場で討死した。

竹内數馬の手では、島徳右衛門が先づ死んで、次い

で、小頭添島九兵衛が死んだ。

高見權右衛門が、十文字槍を揮つて働く間、半弓を持つた小姓は、いつも槍脇を詰めて敵を射てゐたが、後には刀を抜いて切つて廻つた。ふと見れば、鐵砲で權右衛門をねらつてゐるものがある。

「あの丸はわたくしが受け止めます。」と云つて、小姓が權右衛門の前に立つと、丸が來て中つた。小姓は即死した。竹内の組から抜いて高見に附けられた小頭千場作兵衛は、重手を負つて臺所に出て、水瓶の水を飲んだが、其の儘そこにへたばつてゐた。

阿部一族は最初に彌五兵衛が切腹して、市太夫・五太夫・七之丞はさうく、皆深手に息が切れた。家來も多くは討死した。

高見權右衛門は裏表の人数を集めて、阿部の屋敷の裏手にあつた物置小屋を崩させて、それに火を掛けた。風のない日の薄曇の空に、煙が眞つ直に昇つて、遠方から見えた。それから火を踏み消して、跡を水でしめして引上げた。臺所にゐた千場作兵衛、其の外重手を負つたものは、家來や朋輩が肩に掛けて續いた。時刻は丁度未の刻であつた。

(森 鷗外)

*今の午後二時

二九 奈良と伊勢神宮

奈良見物

「青丹よし奈良の舊都は、その景佳酒の如し、人をし
て煦々眠を催さしむ。誠に寝るによし奈良の都よ。」
と某外人は評し候由、面白き洒落にて有之候。定め
しその詞を枕にて、快く一寢入致しし事と存じ候。
予もこの地に來りてあられ酒と申す銘酒を甜め候
が、その口當りの甘き所、成程奈良の景と能く似通ひ
たりと感じ申し候。春日社の石燈籠は、白藤の瀧よ

り先、だらく、登りの處にあるもの、最も古色を帯び
居り候。四座四字の社殿は、先年新築致し候由にて、
丹鮮かに碧濃くして、眼さむるばかり美しく候。名
物の鹿、公園内處々に群がり、人を見ては集まり來り
候へども、今年生れし鹿の子は人を避けて、母鹿と共
に青草の褥に戯れ居り候。ごろく、と怠けて居る
やうでも、かせぎといふ名に違はず、角は櫛に作られ
て、盛んに金となり居り候。この角の櫛を挿すもの
産輕しとて、婦人連争うて買求め候。

南圓堂の前面、金堂の傍にある花の松裏表なく生

ひ茂る様珍しく候。人にも斯くの如き人あらば珍
しかるべく候。若草山の夏草美しく候。三笠山の



名の三つの笠
春の形は右の方
日よりは見えす、
神左より仰げば
社その様明らか
に見え候。天

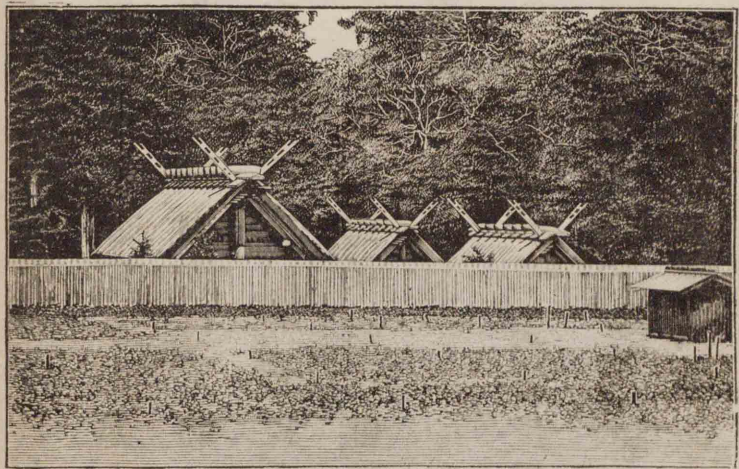
外放浪の客、秋夜この山の月を思ひ浮かべ候も宜な
りこころを領かれ候。この山下に昔の儘の旅籠屋

あれど、旅籠料のみは、昔の儘とは思はれず候。一時
議論の喧しかりし東大寺大佛殿建立も、十年計畫費
用六十餘萬圓にて此の頃成就致し候。金額も大き
なものに候。大佛は千二百年前の鑄造と聞き候
へども、今のは後の改鑄のものにて、もこの儘なるは
臺座の蓮花の一部と申すことにて候。
さて明朝は當地出發。伊勢路を経て歸京のつも
りに候。勿々。

伊勢大廟に額突きて

三笠の山に暇申し、笠置の古趾に眼を與へなごす

るうちに、汽車は木津川の清流畫の如き處に出て候。



伊勢大勢廟

翠巒相疊んで碧水之に纏ふ處、石おもしろく點綴して、天工の美更に一層の美を極め候。彼の赤壁の風光など未だ見たることもなく候へども、もし蘇先生月夜この水に泛んで、その流光を浜り候はば、何と歌はれ候はん。汽車中にて

揚子江の上流
にある直ぐ
たる所

蘇東坡
この赤壁
賦に思ひ
寄せて書
いてある

は月もなく、酒もなく、又詩情を動かすべき洞簫も聞えず候へども、唯憑虚御風、飄々乎こしてこの勝景の間を走り候事、確に羽化登仙の思を致し候。

山田に着し、直ちに二見ヶ浦に向ひ候。この地の人大廟を拜するには、必ず先づ二見ヶ浦に至り潮水に漱ぐか、さらずば海草の鹽を嚙んで然る後に參拜致し候由。予もこの例に倣ひ、翌早旦夫婦岩のほこりに降り立ちて、海水に口を清め候。先年一月この浦に來り候時は、車上宮川堤の寒風に吹きさらされ候ひしが、今は電車にて往返とも至極便利に候。宇

降りまたんこと
のしこしこ 神几や
みまてこ川の流る
流る

治橋に到りて内宮の一の華表を拜し候。降り立たんこともかしこしこ八田知紀ぬしの詠じたる御裳濯川の清流に手を洗うて、恭しく社頭に柏手を打ち申し候。御造營新に成りて、清淨無垢一點の塵をも許さず、國民長久に安かれと鎮め守らせ給ふ御靈徳、只ありがたさの身にしみて、御前の坂を登るだに身體わなゝかるゝ程畏く覚え申し候。それより電車にて外宮を拜し候。神路の山杉、飽くまでも蟲に、高倉山の風はた靜かに、太々神樂の笛の音も澄み渡りて、神も遊び給ふかき、漫ろに畏敬に堪へず候。戴け

る神符を土産にして、今宵は東歸すべく。匆々。

(旅の書簡より)

二〇 懐古

天の河原に八百萬
千萬神の神集ひ、
集ひいませし天地の
始めの時を誰か知る。
それ大神の天雲の

日本武尊東征の時事。

八重かきわけて行く如く、
野の鳥ぞ啼く東路の
碓氷の山にのぼりゆき、
日は照せども影ぞなき
吾妻はやこ戀ひ泣きて、
熱き涙を瀧ぎてし
尊の夢は跡もなし。

大和の國の高市の

(持統)天皇
雷岳にいで
ませる時柿
本朝臣人麿
がよめる
歌。大君は
神にしませ
ば天雲の雷
の上にいほ
りせるかも
(萬葉集)
萬葉集に柿
本人麿が近
江大津の舊
都を過ぐる
時作れる長
歌がある。志
賀の都は荒
れにしが昔
なから山
櫻かな。
(讀人不知)
がある。
仁徳天皇難
波高津の宮
に於て

雷山に御幸して、
天雲のへにいほりせる
御輦のひびき今いづこ。
目をめぐらせば、さざ波や
志賀の都は荒れにしこ、
むかしを思ふ歌人の
澄める怨をなにかせん。
春は霞める高臺に

高殿に見登りて煙はつ
民の煙はつ
にぎはひ
にけり
御詠み
なつた
ふつと
る。傳説が
あ

*醍醐天皇
夜に民の疾
苦を思召し
て御衣を脱
し給うたこ
とがある。

のぼりて見れば、けぶり立つ
民のかまどのながめさへ、
消えてあそなき雲に入る。

冬はしぐるゝ九重の

大宮内のこもしびや、

さむさは雪に凍る夜の

龍のころもはいろもなし。

むかしは遠き船いくさ

人の血汐の流るこも、

今はむなしきわだつみの

まんくこしてきはみなし。

むかしはひろき關ヶ原

つるぎに夢を争へど、

今は寂しき草のみぞ

ばうくこしてはてもなき。

われ今秋の野にいでて、

奥山高くのぼり行き、
都のかたを眺むれば、
あゝく熱きなみだかな。

(島崎藤村)

二一 文明史上の人たれ

人の幸福多くして厚き世を、文明の世といひ、幸福
乏しくして薄き世を、未開の世といふ。今の世は文
明の世なるべしや、未開の世なるべしや。我等が心
の中の望より云へば、猶足らぬところある世にはあ

れど、これを往古に比べ見るに、誠に幸福の多くして
厚き世なれば、文明の世なりと假に稱ふとも、誰かは
あらずと云はん。此の文明の世の源は即ち未開の
世にて、幸福乏しく薄かりし世よりこの方、漸くに一
つ二つづつ人の世の幸福は増し添ひ、歳月を経るに
つけて其の幸福の積り溜まりたるが、即ち幸福多く
して厚き文明の世なり。文明の世は譬へば大河の
流の如し。大河の流は、一朝一夕にして成れるには
あらず、必ず小萩が葉末の露、小笹が上の薄雪などの、
集ひくゝて草がぐれに流るゝほどの小流の、幾千こ

なく聚まり積りて成れるにて、一時一世にして成れるものにはあらず。されば、文明の由つて來るころを思ふに、其の流まここに遼遠にして、其の源ほほと尋ねがたし。されど、或は今より古に溯り、或は古より今に及ぼし、或は本より支を追ひ、或は支より本を考へ、上下東西表裏毫末にても尋ねべき路あらば尋ね進みて、此の文明の由つて來れるところを究めんとするは、心あさからぬ人々の、屢敢へて自ら爲すところにて、これを文明史の攻究といひ、其の攻究の結果の世に現さるゝものを文明史といふ。自他

ともに知りたきは文明史ならずや。文明史を知らんと思ふは人の情の正しく美しき働なり。

人間の幸福多くして厚きを文明の世といひ、其の文明の世の成り立てるさまを記せるを文明史といふなれば、文明史は即ち人間幸福の歴史なり。

我等は我等の祖先と同じやうに世に住めりや、否や。また、我等が子孫の世に立つ状態は我等が世にある態と同じやうなるべしや、否や。我等は如何なる世に立てるなるか、我等は如何に今の世を思ひ做し、如何に我等が身を思ひ做して然るべきか。これ

等のことは、空に物を思ひてのみ自ら覺り知らんこと難し。上つ代の人々の世にありし狀より、今の世の狀をまでよく辨へ知り、またよく比べ量りて、さて後僅かに覺り知るを得べきことなり。人の世の幸福の歴史といふべき文明史は、幸福の少かりし古より多き今に至るまでの間の、さまざまの推移變遷を記さんこともさよりなれば、文明史は人をして自己の位置を覺り知らしむるものなりともいふべし。戦鬪のここを主として記したる史を戦史といふ。戦史の上に現るゝ人々には、男の中の男、俊傑の中の

俊傑として、人に尊まるゝ人少からず。されど、文明史の上に現るゝ人々はこれに比べて、ひこしほ好ましき人々ならずや。火を放ち、城を屠り、人を殺し、地を掠めたりし人々は、今我等に何の功績を遺し置きて示せるぞや。戦史の上の人々の多くは、徒に人の眼を惹く墳墓を遺せるに止れるこそ悲しけれ。忠勇義烈の人々の他の人々は、如何なる猛き士も、土の中の枯れたる骨の有るにも甲斐なくして、今の我等に尊敬仰慕せらるべき些少の功績だに遺らざるを如何にせん。例へば、佐久間玄蕃・武田勝頼等の如き

は、皆ただ徒に人の眼を惹く墳墓を遺せるのみ。其の墳墓は即ち戦史の中の幾枚の紙のみ。文明史の上に見はるゝ人々は然らず。徒に人の眼を惹く墳墓は遺さざれど、其の人は身死して猶長く死せず、骨は朽ちながら猶長く働きて、日々夜々に其の恩恵を我等が上に加ふる人々なり。

戦史を讀みて、忠勇義烈よく其の職に盡くしし人の事を記せる段に至れば、我等は、遠き昔の人の正大剛明の精神直ちに我等が心に浸み透りて、我等が精神に一方ならぬ影響を與ふるを覺ゆ。こは古人の

正しくして剛き精神の徳の我等が上に働くにて、我等が其のために益を被るの大なること、文明史を讀みたるに比すべくもあらず。されど、文明史の上に見はるゝ人々の、如何にして世に一つなり二つなり、の幸福を添ふるに至りしやこいふことを能く見透し得んには、我等はまた精神の上にも益を得べきこと固よりなり。何によらず一事を爲すは易きにあらず。されば文明史の裡には、撓まぬ精神、周密なる心づかひ、鋭き智慧、熱き情などをもて、困難に勝ち、失敗を怖れず、終に其の成さんとしたることを成し遂

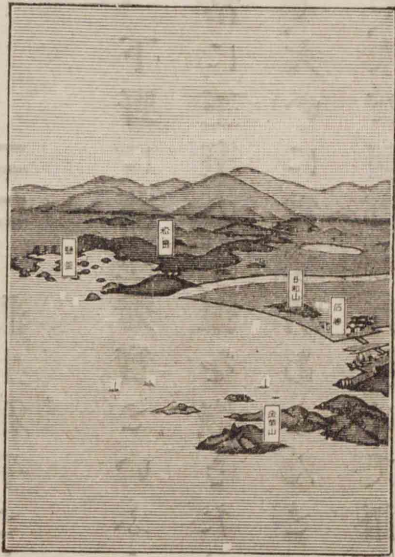
げたる状態の、我等の精神を奮ひ起すもの少からず。ただ其の事戦史の上の人の非常の時のここにかかるもの多く、文明史の上の人の平和の時のここにかゝるもの多ければ、随つて戦史の上の人の事は、我等の心を驚かし胸を踊らしむるやうなるが多けれど、文明史の上に見はるゝ人の方にはさる事少し。さる代りには、文明史の上に見はるゝ人の事の方は、却つて我等には切實にして、手近く直ちに教訓となるべきこと多し。功を竹帛に垂るゝは男子の面目なれども、それは戦史のみに限りたるにあらざるべし。

(幸田露伴)

二二 蒲生君平と高山彦九郎

下野に蒲生秀實といふ人ありき。性忠直にして、常に王室の不振を慨きたり。されば、同志の徒を得て、大いに爲す所あらんことを、時機の至らざるにや、未だ何事も打明けて語らふ者もなかりしに、一たび高山正之の事を聞きて、景慕するこそ大方ならず、いかでさるべき折を得て、互に思ふことをも言ひ試みばやと待ちけり。偶正之北進すを聞き、跡を追ひ

陸奥國北津輕郡の海濱



鹽竈の石巻附近

て到る。白河も越えぬ。陸奥にもなりぬ。鹽竈松島も何ばかりの事かあらん、ただその人を見ればやこのみ馳せ行きけり。されば、森の木蔭に劍を杖つきて行くものあれば、それかと思ひ、船の帆のほのかに人影見ゆれば、かれかと思ひ、馬丁に尋ね、舵取に問へども、ただ知らずこのみ答ふ。今は愈外が濱の波おしわけて、北海にや着きつらむと、船に棹さし、帆かけし

陸前國牡鹿郡の東端に在る山。陸前國牡鹿郡に在る港



蒲生君平

めて、おし進む。金華山かすかに見ゆ。追手よしこ進めば、船は時の間に石の巻に着きぬ。秀實は再び劍に仗りて歩み行くに、さゝやかなる丘あり。そこに塔婆立てり。いかなるものかこ見れば、あなかしこ、後醍醐天皇の御塔婆なりけり。元弘の昔官軍奔りて、この地を鎮めしかば、土人この塔婆を立てて供養し奉りしなるべし。さらぬだに忠直なる本性な

れば、感慨愈、加はりて、見るに忍びず。旅装のまゝ、御前に伏し拜む。あはれ、いかなる思かありけむ。折しも夏の半ばの頃きて、暑さは土も裂くるばかりなるに、古今の盛衰目の前の心地して、體は火にやかるる思するに、夕立の雨のはらく、こ落ち來るも、おのが涙かこ思ふべし。

秀實の急ぐべき旅路に、かく時を費したりしはいかに。故郷を出てしより、見たきもの、聞きたきものは、ただ高山のみなりしに、あたらし、にて時を過ししはいかに。これ大いに説あり。秀實は忠直の士

なり、勤王無雙の人なり。この性を有し、この心をもて、この塔婆の下を過ぐ、いかでか徒に過ぎ行く事を得べき。止りしは思はず止りしならむ、我ながら我を忘れて止りしならむ。否、我が本性に左右せられしならむ。あはれ、この塔婆の下に泣き、この塔婆の下に跪く心ありて、始めてこたびの旅行もありしならむ。

こかくする程に、一樵夫の來るに遇ひぬ。秀實はしばし恍惚として、我あるを忘れたりしが、こののをのこを見て夢の覺めたるが如く、始めて汝偉人を見ざ

りしか。こ問ひぬ。この詞は、是より先にも放つべき
 機はありしならむ。然れども秀實は今やうくこの
 の問を發するに至りしなり。樵夫答へていふやう、
 「曩にやつがれ一士人に備はれ、水を荷ひてこゝに到
 れるに、その人即ち沐浴して禮服を着け、この御塔婆
 の下に跪きて拜せしこゝ數時なりき。さて懷中よ
 り文を取出して讀みぬ。一字終る毎に涙を呑み、一
 句終る毎に鼻すゝりす。やつがれいかなる人なり
 しかを知らざれども、思ふに君の尋ね給ふ人ならむ。」
 秀實はやゝしるべを得て喜び顔に、いかにもその人

なめり。その人にてあらむ。今いづこわたりをか
 過ぎけむ。こいふに、樵夫答へて、「こは既に十日ばかり
 前つかたの事なり。今は追ひかけ給ふとも及び給
 はじ。」こいふ。秀實大いになげき、遂に及ぶべからざ
 るを知りて歸りき。あはれ、正之と秀實とは、ただに
 異體同心なりしならむ。秀實はこの御塔婆の下に
 時を移したりしによりて、正之に及ばざりしにはあ
 らず。正之も同じくこの塔婆の下に時を移ししな
 り。正之の前にこゝに泣きしは、秀實の後に泣きし
 と同じ涙ならむ。あはれ、かくれまして五百年の後、

この兩士の涙を汲み知りましけむ元弘の帝の大御心やいかに。
(歴史讀本)

二三 克己

如何なる事業にせよ、やゝ大なる事業は、其の事業に當れる人の自己の私慾私情に打克ちたるこのために、成就せらるゝものなり。即ち克己の工夫なくして大事業の成就せられたる例は甚だ少し。また如何なる人の事蹟を見ても、其の人にして、やゝ大なる人ならば、其の人は必ず克己の工夫に富みたる

人なり。即ち克己の工夫をなさずして、大人物となり得し人は、殆ど無しといふも可なり。蓋し、自己に克つ能はざる程の人ならば、如何でも能く萬人に勝るゝことを得ん。これ自然の數といふべきのみ。また、人若し自己に克つことを能くせば、其の人は即ち成功といふことの段階に一步を上せし人といふべきなり。蓋し、自己に克つは極めて難事たるには相違なけれども、一度、自己に克ち得たる時は、其の克つことの難きだけ、其の克ち得たることの愉快の大きなるを感ずるものなり。人一度此の克己の愉快を

感じ、其の味を知る時は、常人の見て以て非常の困苦なりとなすところの事をも悦んで處辨し、常人の見て以て其の勞苦堪へ難しとなすところの事をも樂しんでなす事を得べし。例へば、一日に十里の路を行くは常人の能くするところなり。十一里の路を行くは、其の差僅かに一里にして、朝や、夙く出でて歩まんには歩み得べきなれども、曉の眠の心地よきまゝ、夙く起き出で難きは常人の情なり。今、此の情に打克ちて十一里歩みたりとすれば、他の人々は既に我が一里の後にあるなり。我が情に克ちたる當

時の凜然と心の張りし工合、また、今、衆人に先んじて、一里進み得たる眼前の結果何れか愉快ならざらん。此の愉快を味はひ得たる時は、其の人は翌日の同じ場合に於て、自己に克つことの昨日に比して、甚だ容易なるを感ずべく、随つてまた、常人に比して、一里多く歩むことを敢へてするに至るべし。是の如くなれば、次ぎの日の夕には、其の人、常人に先だつこと、二里となるべし。若し右の如きことを重ねんには、常人と其の人の距離は非常に多くなりて、遂には、常人の如何にすとも及ぶべからざるに至るならん。

こゝに説きたる例は、やがて、常人と卓絶したる人との距離の生ずる所以なり。元來、天與の資質の厚きと薄きとによりて、人の勢力に差のあるこゝは争ひがたき事實なれども、先天の差によりて、凡人と非凡人との距離の生ずるよりは、各人の互の心掛の差によりて、甲者と乙者との間の距離の生ずるこゝ、實際の社會に於て甚だ多きを見る。即ち、克己の工夫を用ゐて事に勤むる人、己に克つての工夫を毫末も敢へてせざる人との差は、日に、月に、年に、漸々増大して、竟には、一方の人は非凡となり、一方の人は平凡に

*史記にある句

終るに至るなり。王侯將相、豈種あらんや。こゝは、古人の言なり。これ、王侯將相の、企て及ぶべからざるものにあらざるを喝破したる言ならずや。名を發し、功を立つるも亦然り。凡人、非凡人、豈天の定むるこゝろならんや。自己に克つこゝ、彼等非凡人の如くんば、我等も亦、非凡人たるを得んのみ。
(幸田露伴)

二四 人口登録

一千九百十八年九月、世界大戦争の眞最中、私は北米合衆國の人口登録を紐育で受けた。私は紐育の

ユニオン角園の登録所へ行つた。當時米國は第二國民軍の動員を了へて、第三國民軍の召集をしようといふ前であつたから、街道は星條旗の虹を靡かして行進する軍隊の喇叭の音が高い建物に反響し、市民はもう熱狂してしまつてゐた。青年といへば悉く軍隊の制服を纏ひ、纏はないものは老人と婦人と子供と外國人だけといふほどであつた。

ユニオン角園の登録所で、私の名が合衆國の帳簿の上に登録されて、やがて送附さるべき地方兵事課の召集状を待つ身になつて、私は星條旗に對して熱

心に敬意を表するものとなつた。一週間ばかり立つと、地方兵事課から呼出状が來た。出頭したのは丁度夕方であつた。

館内の廣いホールには星條旗が掲げられ、自由の女神コロンビアの繪箋は壁に貼られて、その上から電球が幾つかの灯の葩を開いてゐた。呼出された人々ははや詰めかけてゐた。黒人もあれば、猶太人もゐた。妻を同伴した英語を解せぬ人もゐた。

私たちは女事務員から下調べを受けて、公式の宣誓場に呼入れられるのを待つてゐた。獨身の市民

は一も二もなく軍籍に入れられた。妻子のある人でも、財産のある人や、また収入のある妻を持った人は同じく軍籍に入れられた。まだ市民になつてゐなかつた外國人でも進んで召集に應ずる宣誓をなしたのもあつた。群集はこれに對して敬意を表した。

私の順番は廻つて來た。私は公式兵事委員の前に立つた。

「先づあなたは虚言を言はないといふことを、右の手を舉げてお誓ひなさい。」

私は右の手を舉げた。

「あなたは合衆國の市民ですか。」

「否。」

「あなたは合衆國の市民となる希望を持つてゐますか。」

私の心の中には或疑問が閃いた。幾人の日本人がこの問に對して「然り」と答へ得るであらう。日本人には合衆國の市民権を與へないことになつてゐる。併し、その市民権を得ようとする希望を持つてゐるか。問はれた時に、その希望だに持つてゐないことを答へる。

へれば、それはつまりこの國に同化するここを拒む
ものであらねばならぬ。太平洋沿岸でもこの同じ
問を發してゐる。それについて我が同胞は何を答
へてゐるであらう。私は暫く默然としてコロンビ
アの繪姿を眺めてゐた。

この國の市民になるには、その人の本國を、この國
を一旦戰端を開いた曉には、その本國に對して銃を
把るこいふことを誓はねばならぬ。私にそれが誓
へようか。いや、私はこの國の市民となることを本
心から望んでゐるだらうか。女神コロンビアの畫

像は私が不知不識に抱いてゐた二重愛國心を憐む
やうに見えた。

委員は緘黙を守つて私の答を待つてゐた。

「否。」

こ私は答へた。

「あなたは合衆國の軍隊に加はつて合衆國の敵を
戰ふ意志を持つてゐませんか。」

私には答をするのが苦しかった。私はこの國に十
三年來住んでゐて、その間この國に養はれて來た。
然るに、今この國が多く犠牲を拂つて戰爭をして

ぬる秋に當つて、この國の爲に戦ふといふ誓を拒まなければならぬのを悲しんだ。若し一度意を決して合衆國の軍隊に加はつて大西洋を渡るならば、私は自分が生れた國土を愛するといふ狭いけれども深い愛國心を捨てなければならぬ。私はそれをば、善い事と考へ得るけれども、私の肉體はまだ故國の土に屬し、私の靈魂はなほ祖先のそれに屬したものであることを考へなければならぬ。私は

「否。」

と答へた。

「それでは、あなたは、あなたの本國に歸つて、あなたの本國の敵と戦ひますか。」

何といふ用心深い質問であらう。何といふ意味の廣汎な質問であらう。今私等の敵と見なしてゐるものは、獨逸及びその聯合國であるが、若し他日、日本とこの國と砲火の間に見ゆる日が來たしたら、私等は本國に歸つて、この國と戦ふかといふ質問になつて來る。この國の市民になるの希望もない、この國の軍隊に加はるのも望まない、しかし、この國との戦には勇んで出るといふ誓を今私は立てればなら

ぬ。私はこの時、私等はこの國から排斥されてもしかたがないと思つた。そして

「然り。」

と答へた。

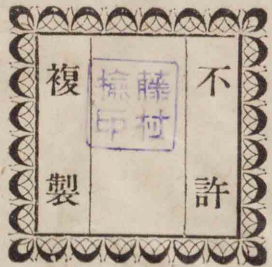
斯うして、私はすこく宣誓場を離れた。下を向いて人々の中を通つて歩廊に出た。
(佐々木指月)

國文新讀本 卷四終

大正十三年十月十三日印
大正十三年十月十六日發
大正十三年十月廿八日訂正
大正十二年八月二十日訂正
三版發行

國文新讀本
定價
卷三 各金四拾三錢
卷四 各金四拾一錢
卷五 各金四拾五錢
卷六 各金三拾四錢
卷七 各金三拾四錢

大正十四年度臨時
定價
卷三 各金七拾七錢
卷四 各金七拾四錢
卷五 各金六拾參錢
卷六 各金六拾參錢
卷七 各金六拾參錢



編者 藤村 作

編者 島津 久基

發行者 佐藤 幹枝

印刷者 高橋 郁

發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番

至文堂

弊堂發行の教科書は供給差支無き様常に澤山製本候來準備致居出問若し各地書店に品切れ等にて御差支有之候節は何卒弊堂へ直接御注文被下度左すば直に送本可申上候



